

# 柏崎市の遺跡XX

—新潟県柏崎市内遺跡 平成21年度後半期発掘調査報告書—

2011

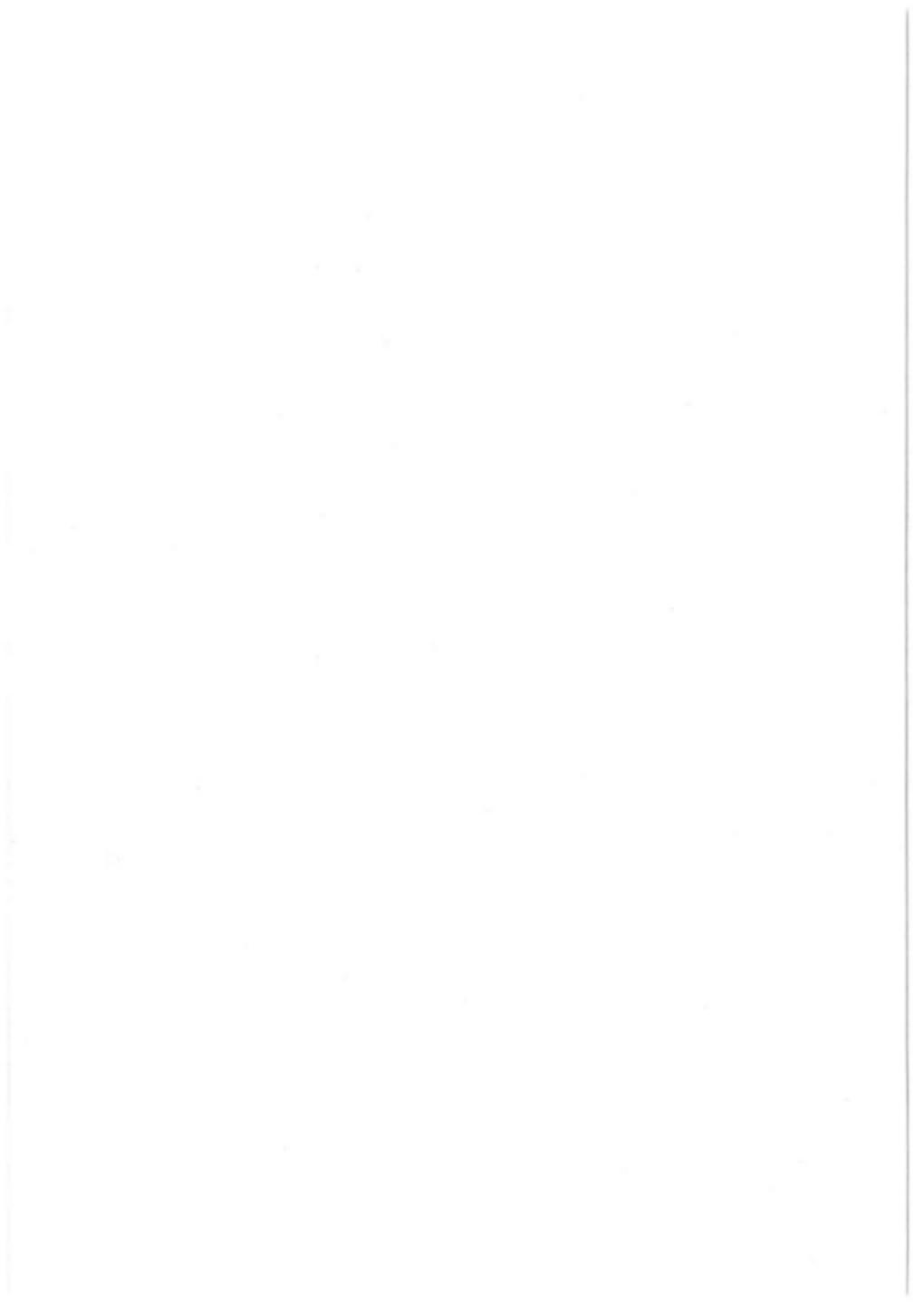
柏崎市教育委員会

# 柏崎市の遺跡 XX

—新潟県柏崎市内遺跡 平成21年度後半期発掘調査報告書—

2011

柏崎市教育委員会



## 序

第XX期となる平成22年度の「柏崎市内遺跡発掘調査事業」では、21年度後半期に実施した試掘調査・確認調査計5件について報告いたします。今回、調査対象区域で明確に遺跡を確認できたものはありませんでしたが、各調査で得られた情報は、いずれも遺跡の保護にとって不可欠なデータとなりました。また、遺跡の有無に関わらず、堆積した土層を観察することで、古環境などに関する所見を得ることができる場合があり、このような遺跡や古環境に関わる資料の蓄積が、やがては地域における歴史の理解へつながっていくこと思います。

国庫補助事業としては、この調査事業の他に「埋蔵文化財保存活用整備事業」があります。平成22年度、柏崎市ではこの事業を実施しました。内容は、平成17年度に合併した旧西山町地域において、これまでの発掘調査等で蓄積されてきた資料を再整理するとともに、同地域の歴史をたどる展示会資料として活用し、成果を市民に還元するものです。展示会は「柏崎市制施行70周年記念考古資料企画展『遺跡が語る西山の歴史』」として、旧西山町内および旧市内の2会場で開催しました。多くの方々に資料をご覧いただき、地域が歩んできた歴史を感じていただければと存じます。

最後に、埋蔵文化財の保護にご理解とご協力をいただいた各土木工事等の事業主体者および関係各位、本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会、そして調査に参加されました調査員・補助員の皆様に対し、深く感謝するとともに、改めて御礼申し上げます。

平成23年3月

柏崎市教育委員会

教育長 小林和徳

# 例 言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市における各種の開発事業に伴って実施した試掘調査・確認調査等の記録である。
2. 本事業は、柏崎市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て平成3年度から実施している「柏崎市内遺跡発掘調査等事業」である。平成22年度は第20年次となる第XX期であることから、本報告書は『柏崎市の遺跡XX』とした。
3. 第XX期で刊行する本報告書は、平成21年度後半期において3遺跡（群・隣接地）・2地区に対して実施した計5件の試掘調査・確認調査の報告を所収する。
4. 各調査の現場作業は、教育総務課職員および柏崎市遺跡考古館のスタッフを調査員・調査補助員として実施した。整理・報告書作成作業は、柏崎市遺跡考古館（柏崎市小倉町）・同館西山整理室（柏崎市西山町西山）において、職員（学芸員）を中心に同館等のスタッフで行った。
5. 調査によって出土した遺物の注記は、各遺跡・地区等の略称の他、試掘坑名・層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（柏崎市遺跡考古館）が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集は伊藤が行った。

第I章 .....	中野 純
第II章 .....	品田高志
第III章・第IV章・第V章・第VI章 .....	伊藤啓雄
第VII章 .....	中島義人

8. 本書掲載の図面類の方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 発掘調査から本書作成に至るまで、それぞれの事業主体者および関係者等から様々なご協力とご理解を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

相羽重徳	大野博子	片山和子	小林 薫	小林美智子	白川智恵	真貝雅義
月橋香奈子	萩野しげ子	吉浦啓子				(50音順・敬称略)
株式会社アール・ケー・イー	株式会社クレアメディコ	株式会社東芝	株式会社宮川設計			
株式会社ゆうあい	東北電力株式会社	農林水産省（北陸農政局 柏崎周辺農業水利事業所）				
新潟県（柏崎地域振興局）	新潟県教育委員会	柏崎市				(順不同・敬称略)

## 調査体制 (平成21・22年度)

調査主体	柏崎市教育委員会	教育長	小林和徳	（担当：教育総務課 遺跡考古館）	
總括	赤川道夫	(教育次長)		～平成22年3月	
		(教育部長)		平成22年4月～	
	遠山和博	(課長)		～平成22年3月	
	本間敏博	(課長)		平成22年4月～	
監理	品田高志	(埋蔵文化財係長・学芸員)			
庶務	田中裕美子	(埋蔵文化財係臨時職員)		平成22年4月～	
調査担当・庶務	品田高志	(埋蔵文化財係長・学芸員)			
	伊藤啓雄	(埋蔵文化財係主査・学芸員)			
	平吹 靖	(埋蔵文化財係主査・学芸員)		～平成22年3月	
	中島義人	(埋蔵文化財係主査・学芸員)			
調査員	中野 純	(埋蔵文化財係主査・学芸員)		～平成22年12月	
		(埋蔵文化財係主任・学芸員)		平成23年1月～	
	石橋夏樹・室屋尚史	(埋蔵文化財係准職員)		～平成22年3月	
調査補助員	池田文江・西谷良子・山岸サチ子（柏崎市遺跡考古館西山整理室	順不同）			
整理業務	徳間香代子・丸山道子・阪田友子（埋蔵文化財係臨時職員）		～平成22年3月		
		(埋蔵文化財係准職員)	平成22年4月～		

# 目 次

I 序 説 .....	1
1 平成21年度発掘調査事業の概要と試掘調査・確認調査地区 .....	1
2 試掘・確認調査地区の位置と環境 .....	4
II 軽井川南遺跡群（第9次） .....	5
1 調査に至る経緯 .....	5
2 試掘調査 .....	6
3 試掘調査その後 .....	8
III 春日陣屋跡 隣接地 .....	9
1 調査に至る経緯 .....	9
2 調査の概要 .....	9
3 調査のまとめ .....	10
IV 春日1丁目地点 .....	14
1 調査に至る経緯 .....	14
2 調査の概要 .....	16
3 調査のまとめ .....	16
V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） .....	17
1 調査に至る経緯 .....	17
2 女谷地区の環境 .....	18
3 調査の概要 .....	21
4 調査のまとめ .....	28
VI 城東地区（横山川第2次） .....	29
1 調査に至る経緯 .....	29
2 試掘調査の概要 .....	29
3 調査のまとめ .....	33

VII 総 括	3 4
（引用・参考文献）	3 4
（報告書抄録）	卷末

## 挿 図 目 次

<b>第Ⅰ章</b>	
第1図 平成21年度柏崎市の発掘調査（現場作業）工程図	1
第2図 第XX期発掘調査対象地点位置図	3
<b>第Ⅱ章</b>	
第3図 工業用高圧送電線鉄塔建設予定地点と新ルート	7
<b>第Ⅲ章</b>	
第4図 春日陣屋跡隣接地試掘調査対象区域	1 1
第5図 春日陣屋跡隣接地試掘調査試掘坑配置図	1 1
第6図 春日陣屋跡隣接地試掘調査基本層序柱状模式図	1 1
第7図 春日陣屋跡周辺採集遺物	1 3
<b>第Ⅳ章</b>	
第8図 春日1丁目地点試掘調査対象区域	1 5
第9図 春日1丁目地点試掘調査試掘坑配置図	1 5
第10図 春日1丁目地点試掘調査基本層序柱状模式図	1 5
<b>第Ⅴ章</b>	
第11図 女谷遺跡群等第2次確認調査対象区域と周辺の遺跡	1 9
第12図 高原田遺跡採集遺物	2 1
第13図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図（1）	2 4
第14図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図（2）	2 4
第15図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図（3）	2 5
第16図 女谷遺跡群等第2次確認調査土層柱状模式図	2 7
第17図 女谷遺跡群等第2次確認調査出土遺物	2 8
<b>第VI章</b>	
第18図 第2次試掘調査の位置と周辺の遺跡	3 0
第19図 城東地区試掘調査トレンチ配置図	3 1
第20図 城東地区試掘調査土層概略図	3 2

## 挿 写 真 目 次

<b>第Ⅲ章</b>	
写真1 春日陣屋跡近景（土壘状遺構付近）	1 3

# 図版目次

## 第Ⅱ章

- 図版1 軽井川南遺跡群（第9次） 1  
a. №4地点周辺 調査前  
d. №4-1地点 完掘全景  
g. №4-2地点 完掘全景  
c. №4-1地点 調査前  
f. №4-2地点 調査前  
h. №4-2地点 層序
- 図版2 軽井川南遺跡群（第9次） 2  
a. №5地点周辺 調査前  
d. №5-1地点 完掘全景  
g. №5-2地点 完掘全景  
b. №5地点周辺 調査前  
e. №5-1地点 層序  
h. №5地点 作業風景  
c. №5-1地点 調査前  
f. №5-2地点 調査前

## 第Ⅲ章

- 図版3 春日陣屋跡 隣接地 1  
a. 調査区全景  
b. 調査区全景
- 図版4 春日陣屋跡 隣接地 2  
a. 調査対象区域近景  
d. TP-3  
b. TP-1  
e. TP-4  
c. TP-2
- 図版5 春日陣屋跡 隣接地 3  
a. 土壌状遺構周辺採集遺物  
b. 調査対象区域採集遺物

## 第Ⅳ章

- 図版6 春日1丁目地点 1  
a. 調査対象区域近景  
b. 調査対象区域近景
- 図版7 春日1丁目地点 2  
a. 試掘坑  
b. 調査風景

## 第Ⅴ章

- 図版8 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 1  
a. 調査対象区域近景 (TP-No.01~04付近)  
b. 調査対象区域近景 (TP-No.05~06付近)
- 図版9 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 2  
a. 調査対象区域近景 (TP-No.06付近から)  
b. 調査対象区域近景 (TP-No.40付近から)
- 図版10 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 3  
a. TP-No.01盛土層除去  
d. TP-No.01層序  
f. TP-No.04層序（上半）  
b. TP-No.01層序（上半）  
e. TP-No.04盛土層除去  
g. TP-No.04底面  
c. TP-No.01底面  
h. TP-No.04層序
- 図版11 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 4  
a. TP-No.05盛土層除去  
d. TP-No.05層序  
f. TP-No.07層序（上半）  
b. TP-No.05層序（上半）  
e. TP-No.07盛土層除去  
g. TP-No.07底面  
c. TP-No.05底面  
h. TP-No.07層序
- 図版12 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 5  
a. TP-No.09盛土層除去  
d. TP-No.09層序  
g. TP-No.12底面  
b. TP-No.09層序（上半）  
e. TP-No.11底面  
h. TP-No.12層序  
c. TP-No.09底面  
f. TP-No.11層序
- 図版13 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 6  
a. TP-No.13底面  
b. TP-No.13層序  
c. TP-No.15底面

	d. TP - №15層序	e. TP - №17底面	f. TP - №17層序
	g. TP - №19底面	h. TP - №19層序	
図版14 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 7			
a. TP - №21盛土層除去	b. TP - №21層序(上半)	c. TP - №21底面	
d. TP - №21層序	e. TP - №23底面	f. TP - №23層序	
g. TP - №25底面	h. TP - №25層序		
図版15 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 8			
a. TP - №26盛土層除去	b. TP - №26層序(上半)	c. TP - №26底面	
d. TP - №26層序	e. TP - №27盛土層除去	h. TP - №27層序	
f. TP - №27層序(上半)	g. TP - №27底面		
図版16 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 9			
a. TP - №28盛土層除去	b. TP - №28層序(上半)	c. TP - №28底面	
d. TP - №28層序	e. TP - №29盛土層除去	h. TP - №29層序	
f. TP - №29層序(上半)	g. TP - №29底面		
図版17 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 10			
a. TP - №31底面	b. TP - №31層序	c. TP - №33底面	
c. TP - №33盛土層除去	d. TP - №33層序(上半)	h. TP - №35層序	
f. TP - №33層序	g. TP - №35底面		
図版18 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 11			
a. TP - №36-2盛土層除去	b. TP - №36-2底面	c. TP - №36-2層序	
d. TP - №36-2層序(下半)	e. TP - №38盛土層除去	h. TP - №38層序	
f. TP - №38層序(上半)	g. TP - №38底面		
図版19 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 12			
a. TP - №40盛土層除去	b. TP - №40層序(上半)	c. TP - №40底面	
d. TP - №40層序	e. 調査風景(TP - №01)	g. 調査風景(TP - №13)	
f. 調査風景(TP - №01)	h. 調査風景(TP - №38)		
図版20 女谷遺跡群・市野新田地区(第2次) 13			
a. 試掘坑埋め戻し状況	b. 出土遺物		
第VI章			
図版21 城東地区(横山川第2次) 1			
a. 調査区近景	b. 調査区近景	c. TP 1層序	
d. TP 2層序	e. TP 3層序	f. TP 4層序	
g. TP 5層序	h. TP 6層序		
図版22 城東地区(横山川第2次) 2			
a. TP 7層序	b. TP 8層序	c. TP 9層序	
d. TP 10層序	e. TP 11層序	f. TP 12層序	
g. TP 13層序	h. TP 11掘削状況		
図版23 城東地区(横山川第2次) 3			
a. TP 14層序	b. TP 15層序	c. TP 16層序	
d. TP 17層序	e. TP 18層序	f. TP 19層序	
g. TP 20層序	h. TP 21層序		
図版24 城東地区(横山川第2次) 4			
a. TP 22層序	b. TP 23層序	c. TP 24層序	
d. TP 25層序	e. TP 20第VI層上面	f. TP 4掘削作業	
g. 測量作業	h. 両岸の掘削状況		

# I 序 説

## 1 平成21年度発掘調査事業の概要と試掘調査・確認調査地区

### 1) はじめに

柏崎市内遺跡発掘調査等事業に伴う本報告書も、本書で20冊目となる。前回までは当該年度に実施した調査は、同一年度での報告書刊行を行っていた。しかし、近年では事業工程の都合等により、雪解け期の2月後半から3月頃に実施する調査が増加してきており、年度末までの報告書刊行に間に合わず、次年度の報告書に掲載せざるを得ない事例を抱えることが常態化しつつある。そのため、このような事態に対応すべく、今回の報告書からは、原則的に前年度に実施した調査の報告を行う方針とした。

平成21年度に柏崎市内で実施した発掘調査事業は、既刊の報告書〔柏崎市教委2010-d〕に詳しく述べられている。本書では平成21年度の12月から3月に実施した調査の報告を掲載するが、ここで改めて平成21年度全体の発掘調査事業を概観する。既刊報告書〔柏崎市教委2010-d〕と重複する部分も多いが、上述のような方針変更があったため、特例としてご容赦願いたい。

### 2) 発掘調査事業の概要

平成21年度に柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した発掘調査事業は、本発掘調査のほか、試掘調査・確認調査および工事立会による調査がある。本発掘調査が1件、試掘・確認調査が6地点9件となっている。工事立会については、既刊の報告書〔柏崎市教委2010-d〕に詳しいので割愛する。

開発事業の減少に伴い、発掘調査事業も全体的に激減している状況である。しかし、試掘・確認調査の原因となった開発事業を見ると、ダム建設や河川改修等の大規模な事業も計画されていることが分かる。本書には掲載されないが、平成22年度には圃場整備に伴う試掘・確認調査も実施している。徐々にではあるが、比較的大規模な開発事業が増えてきており、それに伴って発掘調査事業等も増加傾向に転じつつある。また、開発事業が大規模なため、用地買収等を含めた事業の進捗や、工程・日程調整の結果、試掘・確認調査を数回に分けて実施する場合も多く、実際に原因となった開発件数以上に調査件数が増えている。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本発掘調査												
関町遺跡								■	■			
試掘・確認調査												
女谷遺跡群・市野新田地区			■	■							■	
関町遺跡					■							■
城東地区						■						
軽井川南遺跡群									■			
春日陣屋跡隣接地										■		
春日1丁目地点										■		

第1図 平成21年度 柏崎市の発掘調査（現場作業）工程図

平成21年度は、同一年度内に複数回の試掘・確認を実施した事業が3件もあった。本発掘調査1件を加えると、年間で10件もの調査を実施したことである。本発掘調査を実施した1件も、工事の進捗にあわせて一時的な中断をしており、実際には2回に分けて行ったものである。

このことは、平均するところ毎月のように、調査のための調整協議や準備・撤収、そして報告等を行っている状態を示している。上述のように開発事業の進捗等に起因する部分も大きいのであるが、決して事業数が多くないにも関わらず、文化財保護部局の担当者が調整協議や準備等に右往左往している状況は健全とは言えない。平成21年度は6地点の事業に対して、試掘・確認調査は5割増の9件にもなっている。しかも、その5割増というのは同一年度に限定しての比率である。

このようなことは、特に昨今の経済状況に起因する開発事業側の情勢を背景とするものの、文化財保護部局の各担当者が開発事業の進捗等に振り回され、その対症療法に苦慮している実態の表れであろう。行政機関が実施する発掘調査事業は、現場作業や整理作業および報告書作成作業だけではない。発掘調査の要否や範囲・規模・期間・費用・方法等を策定することこそが第一義的な役割である。そして、それらは現場の努力だけに偏重した内容であってはならない。適切な調整や配慮を欠くと、現場は複多な業務に忙殺され、本来は力を割くべき事を行う時間も気力も能力も奪われるという悪循環に陥ってしまうからである。社会情勢の変化により、文化財保護部局にも従来とは違った困難な状況が生じている。以前にも増して組織的な対応力が求められているのであり、今後も一層努力すべき課題として挙げられる。

**試掘・確認調査（市内遺跡発掘調査等事業）** 本書で報告する試掘・確認調査は、国・県の補助金を得て実施している柏崎市内遺跡発掘調査等事業によって実施したものである。各種開発事業区域内における遺跡の有無や、取扱い協議および本発掘調査の計画策定や費用積算などに必要なデータを把握することを主な目的として行っているものである。平成21年度については、既刊報告書〔柏崎市教委2010d〕に掲載した調査以降に、5件の試掘・確認調査を実施した。本書では、この5件について報告する。

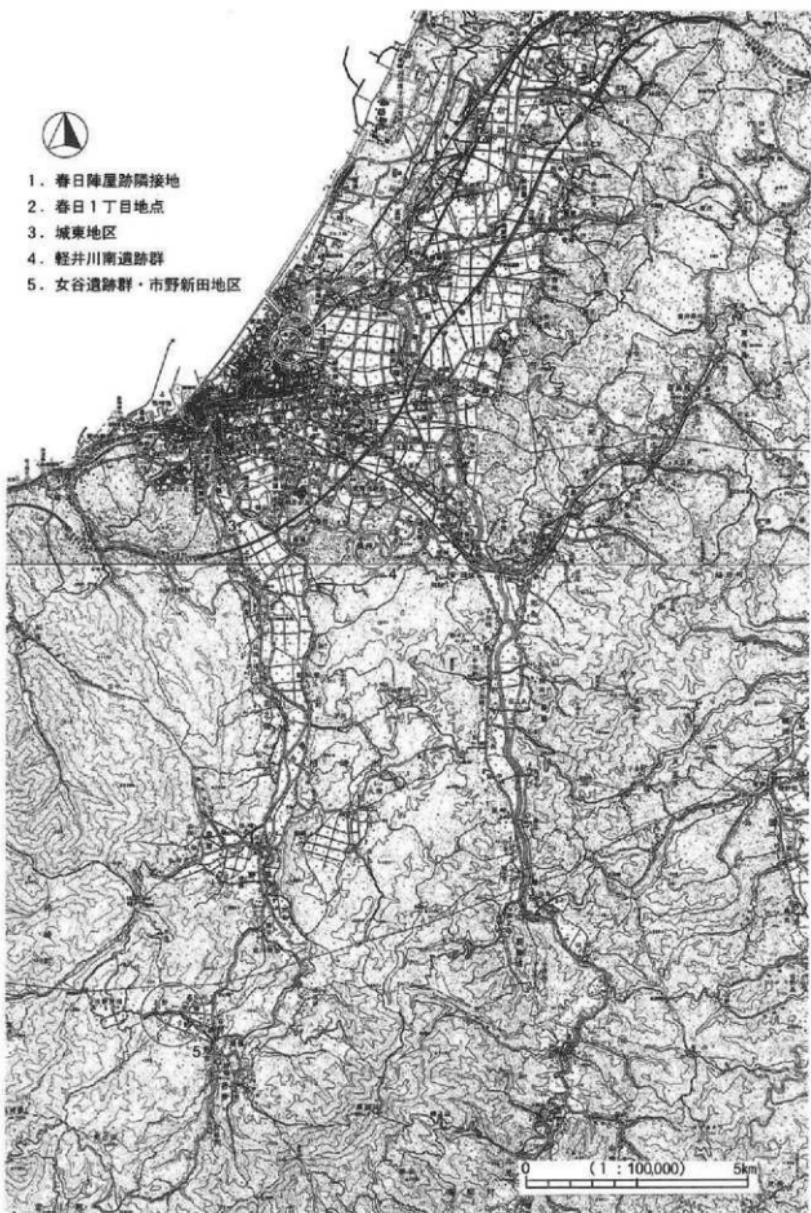
軽井川南遺跡群の第9次確認調査は、工業用高圧電線の新設に伴う鉄塔建設を調査原因として実施した。軽井川南遺跡群は、平安時代を主体とする製鉄遺跡群として知られ、柏崎フロンティアパーク（工業団地）建設事業に伴って、平成15年から平成18年まで本発掘調査が行われた。その工業団地への新規工場建築により、工業用の高圧電線が必要となつたが、鉄塔の建設予定地が発掘調査完了範囲内ではなかつたため、あらためて確認調査が必要となつたものである。

春日陣屋跡隣接地の試掘調査は、民間の有料老人ホーム建設事業に伴つて実施した。地形的には柏崎砂丘上に相当し、陣屋跡の範囲内には該当しないものの、遺跡範囲の延長等が不明であったため、試掘調査を実施することとなった。

春日1丁目地点の試掘調査は、小規模多機能型居宅介護施設の建設を調査原因とする。この施工地周辺では、埋蔵文化財の有無等について、事前の資料や情報がほとんどない状態であった。そのため、未周知の埋蔵文化財が所在する可能性も否定できず、工事に影響が生じる場合も考慮し、今回の試掘調査を行うこととなった。

女谷遺跡群・市野新田地区の第2次確認調査は、農林水産省北陸農政局による柏崎周辺（二期）農業水利事業を調査原因とする。市野新田ダムの新設に伴う幹線導水路の路線が、井上玄場遺跡に隣接するとともに、高原田遺跡の範囲内を通過することから、今回の確認調査を実施することとなった。

城東地区の第2次試掘調査は、二級河川横山川河川改修に伴つて実施した。事業予定地の北側に箕輪遺跡があり、南東部に京田遺跡が立地するため、遺跡の範囲が及ぶ可能性を考慮して試掘調査を実施した。



第2図 第XX期発掘調査対象地点位置図

## 2 試掘・確認調査地区の位置と環境

**柏崎平野の地形概観** 柏崎市は日本海に面した新潟県のほぼ中央に位置し、柏崎刈羽圏域の中心となる小都市である。行政的地域区分では中越地方に属し、面積は約442.7km<sup>2</sup>で、人口は約9.1万人である。中越地方は魚沼地域を主体とする南部と、信濃川中流域を主体に柏崎平野までを含む北部とに区分可能であるが、柏崎平野は北部でも西半部に位置している。新潟県には、信濃川や阿賀野川等の大河によって形成された新潟平野（越後平野、蒲原平野）や、関川水系に属する高田平野（頸城平野）といった比較的大な平野が形成されている。柏崎平野は、これら二大平野の中間に位置しており、山地や丘陵等による分水嶺によって隔たれた独立平野である。

柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海冲積平野を中心とし、その北部に鯖石川の支流の別山川沿いに形成された沖積地が広がっている。柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、東頸城丘陵の一部に相当し、西から米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を個々の頂点として、鶴川・鯖石川により西部・中部・東部に三分されている。東部の丘陵には褶曲構造が発達し、南西から北東方向の背斜軸に沿って、西から西山丘陵・曾地丘陵・八石丘陵が北側から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川等の鯖石川支流が南北方向に流路をとっている。

中央部は、黒姫山を頂点として北へ向かって緩やかに高度を下げ、沖積地に接する北端部には広い中位段丘を形成し、その北側には湿地性の強い沖積平野が広がっている。西部は、米山を頂点とする傾斜の強い山塊が広がり、海岸部まで張り出して断崖を形成している。そのため、沖積地の形成は少なく、砂浜もほとんどみられない標石海岸を主としている。

平野部の北西面は、日本海の荒波に洗われているが、海岸線に沿って荒浜砂丘・柏崎砂丘が横たわり、柏崎市の現市街地が広がっている。これらの砂丘から丘陵部に至る沖積地は、砂丘後背地として極めて湿地性の強い低地となり、鯖石川や鶴川等の河川による自然堤防の形成が顕著となっている。

今回報告する5件の調査対象地は、柏崎市域に広く分布するが、以下でそれらの地域を概観したい。

**平野南部** 柏崎平野の南部には、標高20~30mの丘陵域が形成されている。中央には軽井川が西流し、丘陵を大きく南北に二分している。軽井川南遺跡群は、軽井川左岸に展開する丘陵上に立地している。

**鯖石川下流域** 鯖石川は下流に至って別山川と合流し、その後も蛇行を繰り返しながら日本海に注ぐ。現河道は両側に自然堤防を形成し、比較的安定しているが、かつては東西に大きく流路を変えたと考えられる。春日陣屋跡及び春日1丁目地点は、鯖石川下流域左岸の柏崎砂丘に位置している。

**鶴川上流域** 上流域における鶴川は、黒姫山西麓を侵食しながら河岸段丘を形成している。そして、鶴川とその支流の阿相島川の合流点には、盆地が形成されている。この盆地は女谷盆地と呼ばれており、標高190m前後の平坦地となっている。井上玄場遺跡および高原田遺跡は、女谷盆地に立地し、地形的には沖積地内に相当する地点に分布している。また、周辺の微高地上には、宮原A遺跡・宮原B遺跡の存在も知られている。

**鶴川下流域** 鶴川下流の右岸には、広い沖積地が形成されている。横山川は鶴川の支流であり、柏崎平野の南側で集まつた水流が城東地内を北西へ流れ、宮場町地内に合流している。この一帯は近年まで湿地帯が広がり、鏡ヶ池と呼ばれていた。そのため、現在でも周辺より地盤が低く、浸水被害が度々起こっており、今回の試掘調査原因となった城東地区の河川改修工事が計画されることになった。

## II 軽井川南遺跡群（第9次）

— 工業用高圧送電線新設工事に係る試掘調査 —

### 1 調査に至る経緯

**事前協議** 株式会社東芝（以下「東芝」）は、柏崎フロンティアパーク（「柏崎F P」）にリチウムイオン電池量産工場を新規に建設することを決定し、工場操業に必要な電力の供給を、東北電力株式会社新潟支社（以下「東北電力」）に依頼した。東北電力では、工業用高圧電線の新設に際して、鉄塔を建設することが必要であるが、供用開始まで工期にゆとりがないため、埋蔵文化財の取扱いについて事前協議を開始した。初期段階では、文化財保護法関連の手続きその他の取扱いに関する情報収集が中心であったが、本格化したのは鉄塔の建設位置がおむね決定した11月に至ってからである。

軽井川南遺跡群は、平安時代の鉄生産関連遺跡として知られ、平成15年度から平成18年度まで、紆余曲折を経ながらも一部を除き全面発掘調査が行われた【柏崎市教委2010a・b・c】。協議においては、鉄塔建設位置について、遺跡の保護と本発掘調査等を回避することを兼ね、可能な限り鉄生産関連遺構が存在する立地を避け、かつ縄文集落等その他の遺跡が所在する可能性が少ない場所を選定することで合意していた。東北電力は、鉄塔建設予定地点を仮決定し、市教委担当とともに現地を確認することとした。

鉄塔建設計画の概要は、鉄塔6ヶ所6地点、すべて柏崎市所有の緑地を活用し、各鉄塔用地は12m四方を基本とし、掘削は鉄塔脚の基礎4ヶ所に対し直径2mで穿たれるとのことであった。鉄塔建設ルートは、当初A案・B案の2ルートが検討されていたが、最終的にはA案が採用された。提示された鉄塔建設予定地点は、6ヶ所すべてが周知の遺跡範囲外に位置し、かつ製鉄炉や木炭窯が立地する可能性が高い斜面下方や、また縄文集落などが営まれそうな台地平坦部を避けたものであった。しかし、鉄生産関連遺跡が濃厚に分布する軽井川南遺跡群の特性から、未周知の遺跡が存在する可能性をすべて否定できない。また、工事中に新たな遺跡が発見されるなど、不測の事態が生じることは、埋蔵文化財保護の観点だけではなく、短い工期を考慮した場合、当該事業完遂へ相当なリスクを背負うことが明らかなることから、現地を確認し、遺跡の有無や試掘調査等の要否を判断することとした。

**現地踏査** 平成21年12月7日、鉄塔建設予定地点6ヶ所に対し、現地確認を実施した。送電線ルートは、現田尻工業団地の既設塔の移設・建替え地点のNo.10塔から、No.1塔⇒No.2塔⇒No.3塔⇒No.4塔⇒No.5塔へと順を追って実施した。各地点の所見・評価は以下のとおりである。

- No.10 柏崎F P外の既設塔脇に建替えするもの（田尻工業団地支線の一部）。周囲は既に整地をされており、改めて調査を行う必要は無いと判断される。
- No.1 Aルート・Bルートにより建設位置が若干変わる。Aルート上のNo.1の位置であれば、製鉄関連遺構の立地も想定され、重機による試掘が必要となる。現地打合せで、鉄生産関連遺構が存在する可能性の低い西側の丘の頂上付近（もしくはBルートのNo.1付近）に設計変更が検討された。後日、設計後の位置を再確認し、改めて取扱い等を検討することとした。

なお、本地点における工事資材の運搬に当たっては、東側斜面から重機により搬入する計画で

あり、搬入路確保のため斜面の一部を掘削する必要が生じる。掘削箇所に製鉄遺構が存在することも想定されるので、事前に搬入路をチェックするとともに、掘削に際し工事立会等が必要であるとした。

- No.2 Aルート案の場合に建設される鉄塔である。柏崎F P造成時、遺跡が存在する可能性が低いことから調査対象から除外したエリアとなる。既に盛土整地され現在駐車場となっている。試掘調査等の必要は無いものと判断される。
- No.3 台地頂上部の縁辺部に位置し、柏崎F P縁地帯内となる。平成13年度において、付近で簡易な試掘調査を実施しているが、遺物・遺構とともに確認されていない〔柏崎市教委2002〕。よって、試掘調査等の必要は無いと判断される。
- No.4 台地頂上部に位置し、縁地帯内となる。これまでこの付近で柏崎F P造成に伴う試掘調査は実施されていない。立地からは、製鉄遺跡の存在は想定されないが、縄文時代の集落等が存在する可能性を否定できない。何らかの事前調査が必要と考えられる。
- No.5 台地頂上部の縁辺部となり、縁地帯内に位置する。縄文時代の遺構等が存在する可能性も考えられ、何らかの事前調査が必要と考えられる。

以上、現地踏査の所見・評価から、未周知の遺跡が存在する兆候はまったく認められなかったが、現段階では、No.4・5の鉄塔建設予定地については、遺跡の有無等に関するデータが不足しており、何らかの調査が必要と判断された。ただし、両地点とも、木炭窯等の製鉄遺構が存在する可能性が低いことから、縄文集落等の可能性を見極めるため、人力による簡易な試掘を行い、地下の状況や層序、および遺物の有無を確認することとした。

## 2 試掘調査

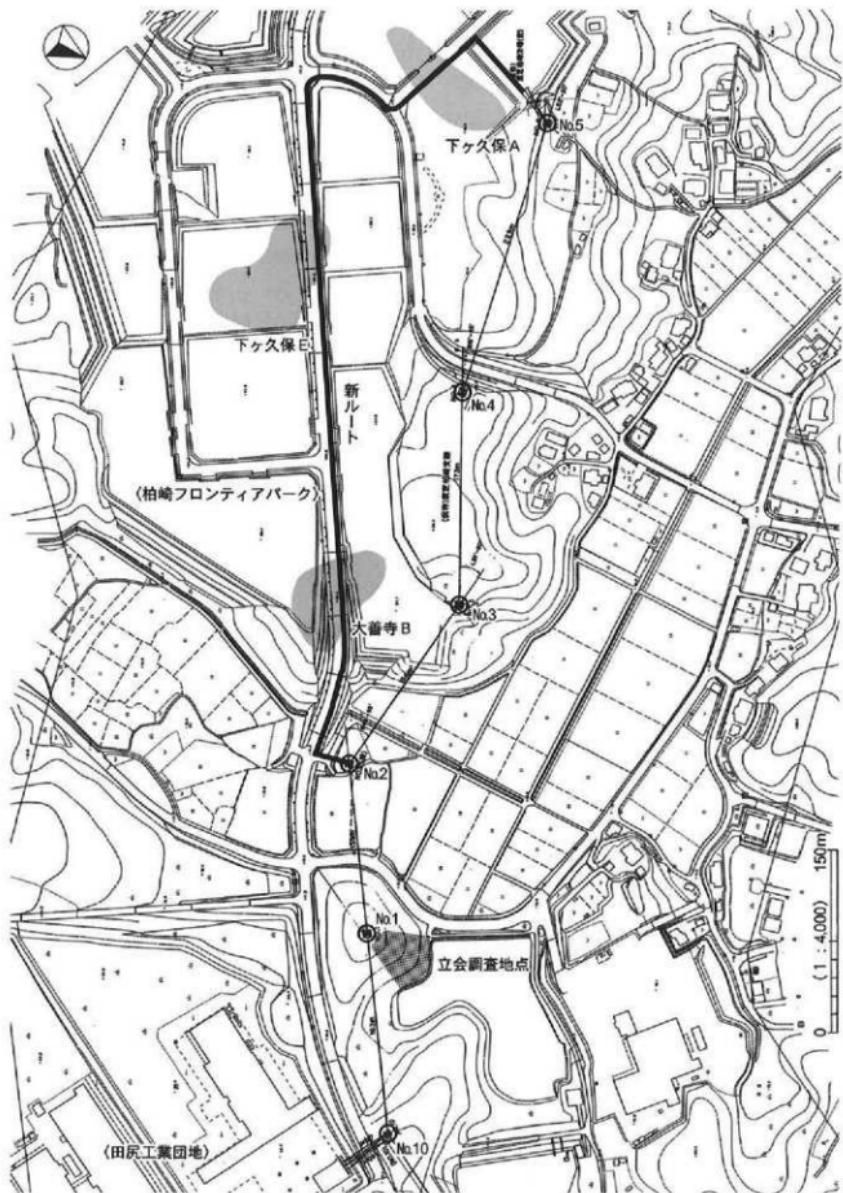
東北電力は、現地踏査の結果、鉄塔建設予定地点の一部において、試掘調査等の実施が必要となったことから、平成21年12月11日付けで、市教委に対し埋蔵文化財の調査を依頼した。市教委は、調査依頼を了解するとともに、鉄塔脚の位置を現地に明示する作業を東北電力に依頼した。

市教委は、平成21年12月24日、文化財保護法第99条の規定により県教委宛に埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同日に試掘を実施した。

調査員は担当を含め3名、雪が積もる現地に赴いた。今回の試掘は、調査予定地が縁地として山林であったことから、伐採等が必要な重機等による本格的な試掘の要否判断をすることが目的であり、鉄塔脚部の該等地点に直径50cmほどのテストピットを穿ち、層序や遺物の有無を確認することとしていた。

まず、No.5鉄塔予定地点から調査を開始した。地形的には、台地の平坦面が傾斜を始める肩部分に相当し、縄文集落があれば、土器類等が出土するはずである。現況は山林で、試掘坑は2ヶ所を発掘した。その結果、両試掘坑とも、遺物は皆無であり、確認された層序では、有機質を含む暗色土層が存在せず、いわゆる遺物包含層は形成されなかったと判断した。

No.4鉄塔予定地点は、台地の縁辺に相当するが、地形としては平坦地であり、縄文集落等が想定できた。しかし、これまで調査した実績がなく、遺跡の有無などはまったく未知であった。現況はやはり山林であり、現地の積雪は50cmを超えていた。試掘坑2ヶ所を発掘したが、遺物も皆無、有機質等を含む暗色土の形成は乏しく、遺物包含層はないものと判断した。



第3図 工業用高圧送電線鉄塔建設予定地点と新ルート

### 3 試掘調査その後

**送電ルートの変更** 東北電力が計画した東芝柏崎支線鉄塔建設に関して、現地踏査と軽易な試掘調査の結果、工事予定地点に遺跡が存在する可能性が極めて低いと判断し、埋蔵文化財の取扱いに関しては、慎重工事が妥当としたところであった。

ところが、平成22年2月2日の協議において、送電開始日程が当初の平成23年4月1日の予定から、同年2月1日へと急きょ変更され、鉄塔を建設する当初計画では間に合わなくなったことから、送電ルートの変更が提示された。変更点とは、No.10塔から、No.1塔⇒No.2塔のあと、柏崎FP内の幹線道路下を埋設する内容であった。当該変更ルート上には、下ヶ久保A遺跡、下ヶ久保E遺跡、大善寺B遺跡の3遺跡が所在した。しかし、3遺跡はすべて、柏崎FP造成事業に伴い、すでに全面発掘調査が終了していたことから、文化財保護法第93条第1項の土木工事等の届出後、慎重工事として取り扱うこととした。

**工事立会** 当該事業に伴う埋蔵文化財関係については、文化財保護法に関する手続き等は基本的に終了した。しかし、No.1鉄塔建設予定地点については、周知の遺跡は未確認であったが、作業ヤードの造成部分や資材搬入路の造成により、地表面の掘削が若干行われることとなっており、これらについては工事立会として取扱うこととなっていた。

平成22年4月22日、作業計画がおおむね策定されたことから、現地で工事概要の説明を受けつつ掘削される範囲や地形などの確認を行った。その結果、作業ヤード造成予定地点は、緩やかな斜面であり、製鉄炉とすれば、長方形箱型炉の立地に適していることが判明した。また、資材搬入予定ルートには、木炭窯も想定することができた。しかし、掘削される深度は浅く、木炭窯については特に問題はないものと思われるが、製鉄炉が所在した場合には、何らかの対処が必要と考えられた。

そこで、同年4月27日、改めて現地踏査を実施した。踏査における調査方法とは、長方形箱型炉が想定される緩斜面エリアに対し、ピンポールを使用してボーリングし、炉本体もしくは廃滓場を確認することを意図したものである。しかし、廃滓場等の兆候は一切認められず、周辺部の表面探集においても、鉄滓類を確認できなかった。これらの状況から、基本的に製鉄炉が存在する可能性は極めて低くなつたが、念のため工事に立会い、不測の事態に備えることとした。

平成22年8月9日、午後からの作業に立会った。斜面下方部における作業ヤード造成では、地山面の一部が露出したが、木炭・焼土などは一切検出されず、鉄滓類の出土も皆無であった。また、搬入路の造成に伴う抜根作業にも立会つたが、木炭や焼土は検出されなかつた。さらに、鉄塔建設予定地点においても、表土除去作業に立会つたが、木炭や焼土は皆無であり、これらの状況から、遺跡は存在していないものと判断し、工事立会を終了した。

この工事立会により、当該事業にかかる埋蔵文化財関係の業務をすべて完了することとなった。

**おわりに** 今回の送電線新設事業に関しては、事前に遺跡の立地条件を吟味し、遺跡が分布しない可能性が高い地点を可能な限り選択して鉄塔建設位置を決定したものであり、結果として一つの遺跡も損なうことなく、また建設事業を円滑に推進することとなった。これは、開発サイドと文化財保護部局との連携が功を奏したと思われるが、両者の立場を尊重しつつ、互いが一体となって事業を進めた結果でもある。このような環境づくりは、埋蔵文化財の保護行政を継続していく上でも大切であるとすることができるであろう。

### III 春日陣屋跡 隣接地

—柏崎有料老人ホーム建設工事に係る試掘調査—

#### 1 調査に至る経緯

春日陣屋跡は、柏崎市春日2丁目地内、中心市街地の約1.7km北東にある。地形的には、鰐石川下流域左岸の柏崎砂丘に位置する。南西側の隣接地で土木工事等の計画があったため、埋蔵文化財に関する協議や調査を実施することとなった。

平成22年1月28日、事業主体者の代理人から、埋蔵文化財の所在確認が依頼された。柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）は協議が必要と回答したところ、翌29日に施工担当者から工事内容の説明を受けることとなった。さらに、2月3日には、設計担当者から詳細な説明を受けた。工事は、有料老人ホームの建設で、民間企業を事業主体とする。工事において掘削を伴うのは、基礎部分と浴室部分である。基礎は、いわゆる「布基礎」で、全体にわたって最大幅0.75m、深度0.45mが掘削される。浴室は、その下に設置される貯水施設の容量によるが、協議段階では約3.9m×約6.6m=約25.7m<sup>2</sup>の範囲において、深度1.7mが掘削される計画とのことである。

協議後、市教委では現地確認などを行っていたが、積雪もあって十分な所見は得られなかった。そのため、まずは簡易な試掘調査を行うこととし、事業主体者・土地所有者といった関係者から同意を得た後、調査を2月10日に設定して準備を進めていった。

市教委では、2月8日付け教総第603号で試掘調査の着手を新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略）教育長へ報告した。調査は予定どおり開始され、同日中に終了した。その後、調査の結果をもとに事業主体側（施工担当者）と協議を行い、調査の結果や取扱いについて説明した。また、同月12日付け教総第615号の2で県教委教育長へ報告した。

#### 2 調査の概要

##### 1) 調査の目的と方法

今回の調査の目的は、基礎工事（掘削深度0.45m）で影響が生じる遺跡の有無について確認することである。浴室部分（掘削深度1.7m）については、その結果も考慮しながら検討する。具体的な調査の方法としては、0.4m四方、深度0.5m程度の試掘坑を人力で発掘し、土層を観察する。試掘坑はひとまず4ヶ所とし、位置は事業主体側と協議の上、土地所有者に支障のない部分を確認して設定した。

春日陣屋跡は、施工区域北東側の標高約5mの付近にある。現在畠地となっている施工区域は、これよりも1段低い地形にあり、1～2mの段差が認められる部分もある。そのため、陣屋跡とは地形的に連続した立地とはいえない。しかし、調査当日までにある程度の融雪があったことから、周辺を踏査したところ、比較的多くの陶磁器片を探集することができた。その中には、陣屋が営まれていた近世中～後期のものも含まれていた。したがって、何らかの関連遺跡が所在した可能性も生じた。

## 2) 調査の経過と試掘坑の概要

試掘調査は、平成22年2月10日に実施した。当日は比較的気温が高く、曇天で一時降雨がみられた。そのため、数日来の積雪はほとんど残っていなかった。調査員は担当を含む2名で、調査は半日で終了した。試掘坑(0.4m×0.4m)は4ヶ所で、面積は合計約0.6m<sup>2</sup>である。これは施工面積約1,100m<sup>2</sup>の約0.04%にあたる。

まず西側からTP-1を発掘する。TP-1は、西側の市道から約7m、施工区域西端から約4mの位置にある。表面には、厚さ10cmほどの黒灰色砂質土がみられた。これは現況である畑地の耕作土層(第0a層)であるが、それを除去すると、灰色砂層となった。この層には黒色土などが混じっていたため、自然堆積層とは考えられず、盛土層(第0b層)と判断された。層厚は16cmほどであった。さらに基礎工事の掘削深度まで掘り下げるとき、暗灰色砂層(第Ia層)となつた。締まりが強く、湧水があった。これは自然堆積層とみられ、砂丘砂層の一部と考えられる。この段階で、遺構・遺物は検出されていない。

次に、西側の市道から約20m、施工区域西端から約17mの位置にTP-2を発掘する。TP-2もTP-1とはほぼ同じ状況であった。遺構・遺物は検出されていない。

引き続き、西側の市道から約34m、施工区域西端から約31mの位置にTP-3を設定した。畑地内の耕作部分ではなく、通路にある。深度16cmまでは黒褐色を呈する盛土層(第0b層)となつていていたが、それ以下は褐灰色を呈する砂丘砂層(第Ia層)となつていていた。耕作土層(第0a層)がない以外はTP-1・2と同じ状況である。遺構・遺物は検出されていない。

最後に、西側の市道から約50m、施工区域西端から約47mの位置にTP-4を発掘した。厚さ約23cmの耕作土層(第0a層)を除去すると、締まりのある褐灰色砂層(第Ia層)となつた。さらに工事掘削深度まで掘り下げるとき、深度約40cmで灰褐色砂層(第Ib層)となつた。締まりが強く、第Ia層と同様に砂丘砂層の一部と考えられるが、より酸化色となつていて、遺構・遺物は検出されていない。

## 3) 基本層序

今回の試掘調査で得られた層序データは、基礎工事で掘削を受ける深度約45cmまでのものであるが、これらを整理すると、土層は第0層・第I層に大きく分類することができる。

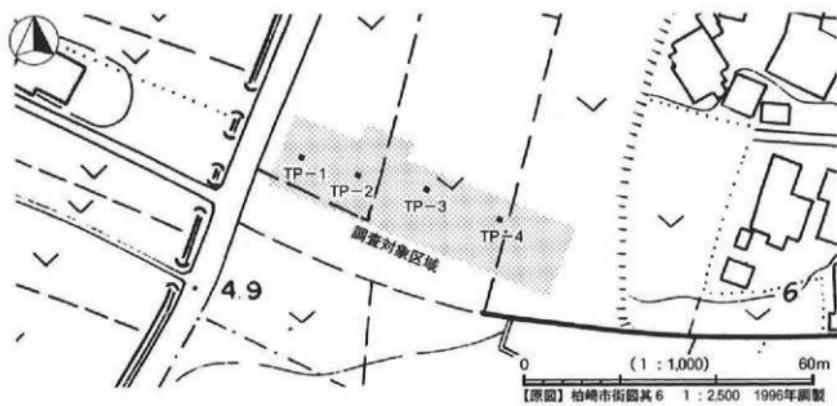
第0層は、耕作土層(第0a層)および盛土層(第0b層)である。これに対し、第I層は自然堆積層で、砂丘砂層の一部に相当するものと考えられる。おおむね褐色もしくは暗灰褐色を呈しており、締まりが強い(第Ia層)。TP-4のみでは、より酸化している褐灰色砂層(第Ib層)がその下層から検出された。遺物包含層などは確認されていない。

## 3 調査のまとめ

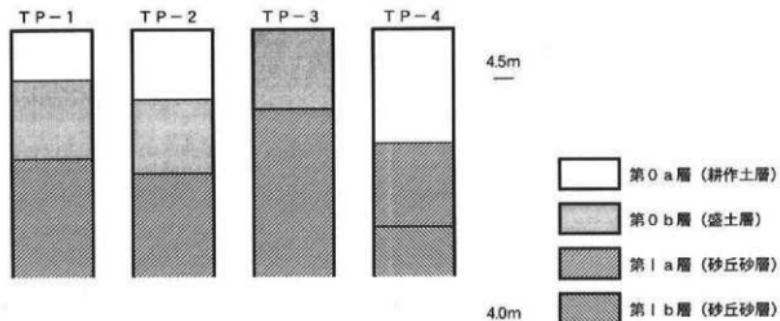
以上のことから、調査原因となった事業のうち、基礎工事で掘削される深度までは、遺跡に関わる土層はみられないことが確認された。第I層が砂丘砂層の可能性があるため、この地点の砂丘上には遺跡が存在した可能性は低いと考えられる。しかし、砂丘が形成された時期については明らかではないことから、より深度の大きい地点における遺跡の存在については注意が必要である。そのため、浴室部分(掘削深度1.7m)については、工事立会を実施して確認することとした。



第4図 春日陣屋跡隣接地試掘調査対象区域



第5図 春日陣屋跡隣接地試掘調査試掘坑配置図



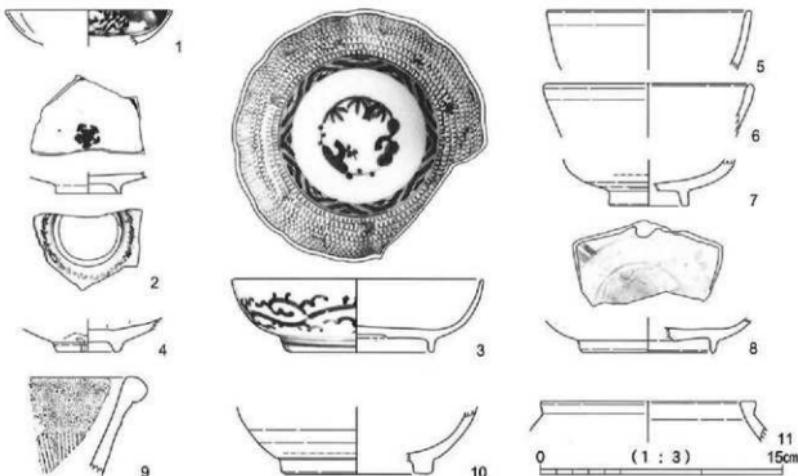
第6図 春日陣屋跡隣接地試掘調査基本層序柱状模式図 (S = 1 : 10)

ところで、調査区周辺からは陶磁器片が多く採集されたことはすでに触れた。遺物包含層が確認されなかったことから、これらの陶磁器片は盛土層である第0 b層に伴っていた可能性が考えられる。盛土の出自は明らかではないが、春日陣屋跡を含めた近接地点と考えられる。本章の最後に、春日陣屋跡周辺で採集されている遺物について紹介することとした。

春日陣屋跡の現況は、宅地や畠地となっている区域が多い。そのため、遺物の採集が可能な地点は限定されるが、今回の調査対象区域以外では陣屋の東側に位置すると目されている土壌状遺構（土手）で採集することができた。この土壌状遺構は、延長約20m、高さ約1.5mで、南北方向に延びている〔勝田ほか1977〕。陣屋の痕跡を今に伝える数少ない資料のひとつである。過去の現地踏査などを含めると、土壌状遺構から約10点、調査対象区域から約40点の遺物（小片を含む）を採集できた。以下、図化が可能だった11点を報告する。1～4が土壌状遺構、5～11が調査対象区域周辺から採集したものである。記載にあたっては、先行研究〔盛2000・家田2000・野上2000・中野2000など〕をもとにすると、産地の比定などについては相羽重徳氏からのご教示を得ている。

1は産地不明、2～4は肥前（系）の磁器皿である。1は、口縁部～胴部下半の破片である。型打技法による成形で、口縁形態は輪花形である。生産時期は近代の可能性もある。2は、胴部下半～底部の破片である。見込にはコンニャク印判による五弁花、胴部下半外面には間隔の狭い○×文、高台脇には一重の圓線がめぐる。そして、高台外面には二重の圓線がみられる。肥前のIV期でも後半（18世紀中～後葉）の製品とみられる。ただし、器種は蓋の可能性も考えられる。3は、完形に近いが、口縁部～胴部の一部を欠損したものである。輪花状の口縁部、蛇の目凹型高台の形態である。胴部外面は如意頭文崩れの唐草文、内面にはみじん唐草文、見込には環状の松竹梅文がみられる。肥前のV期でも後半（19世紀前～中葉）の製品であろう。4は、胴部下半～底部の破片で、肥前でも波佐見の製品とみられる。見込は蛇の目釉剥ぎされ、胴部下半は無釉である。波佐見のIV期～V～I期前半（17世紀後半）と考えられる。

5・9は肥前陶器、8は肥前磁器、6・7・10・11は産地不明の陶器である。5は、碗の口縁部～胴部の破片で、胎土は灰白色、釉薬は浅黄色を呈している。呉器手形と思われる所以、III～IV期（17世紀後半～18世紀後葉）と考えられる。6は、碗の口縁部～胴部の破片である。口縁部がやや厚く、胴部上半が内寄する形態である。胴部は内外面とも灰白色であるが、口縁部は内外面が浅黄色の釉薬が施されている。胎土は灰白色で、おおむね堅致であるが、粗い部分もみられる。産地は萩焼の可能性があるが、時期等は不明である。7は、碗の胴部下半～底部の破片である。外面は細かい幅で削られている。胎土は灰色、高台も含めた内外面に茶褐色の釉薬が施され、胴部上半はその上に透明釉と染付がみられる。全体的に陶胎染付に類似しているが、肥前産とはみられない。近代以降の製品であろうか。8は、皿の胴部下半～底部の破片である。蛇の目凹型高台の形態で、見込には圓線内に植物文などがみられる。肥前のV期（18世紀後葉～19世紀中葉）の製品である。被熱のためか、釉薬がやや劣化している。9は、撞鉢の口縁部の破片である。玉縁状の形態で、全面に鉄釉が施されている。玉縁の形態は肥前のIII期（17世紀後半）に多いが、18世紀前半あるいはそれ以降の製品との共併例がある。さらに、全面施釉はIV期（17世紀末～18世紀前半）以降の特徴であるため、時期は18世紀前半以降と考えておきたい。10は、鉢の胴部下半～底部の破片である。口クロ成形で、外面のケズリが明瞭である。灰白色的釉薬が施されるが、底部～高台の外面は露胎である。産地については関西系とも考えられるが、明確ではない。近世後期の製品と思われるが、具体的には不明である。また、11は、壺・甕類の口縁部～胴部上半の破片である。短い口縁部から胴部が「ハ」の字に開く。外面および口縁部内面には白色の釉薬があり、文様が施される。内面は胴部付近から灰色の



第7図 春日陣屋跡周辺採集遺物



写真1 春日陣屋跡近景（土壠状遺構付近）（北から）

雜葉がみられる。胎土は赤褐色で、軟質感がある。時期等は不明である。

以上、時期が不明なものもあったが、2～5・8～10は、陣屋が営まれていた時代（1709～1867年）の遺物である。產地が明らかではないものも含め、肥前産ではない製品が半数近くを占めた。これは近世後期の様相に近い。春日陣屋の状況については不明確な部分が多いが、詳細については今後の資料の蓄積が必要である。

## IV 春日1丁目地点

— 小規模多機能型居宅介護施設工事に係る試掘調査 —

### 1 調査に至る経緯

柏崎市春日1丁目地点は、中心市街地から約1.2km北東にある住宅地である。地形的には、鯖石川下流域左岸の柏崎砂丘にある。同地点の一角に土木工事等の計画があったため、埋蔵文化財に関する協議や調査を実施することとなった。

原因となった工事について、柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）が把握するに至ったのは、市教委が実施した埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の第2次状況調査による。この調査は、平成21年10月19日付け事務連絡で市の関係各課に照会したものである。これに対する福祉保健部介護高齢課からの回答の中に、当地点における工事があり、資料の提供もあった。工事は、小規模多機能型居宅介護施設の建設で、民間企業を事業主体とする。この段階では、施工地周辺における埋蔵文化財の有無などについて、ほとんど資料や情報のない状態であった。そのため、未周知の埋蔵文化財が所在し、工事に影響が生じる場合を考慮し、事前に事業主体者と協議をすることとした。

平成22年2月、工事の内容が具体化したことにより、実際に協議が開始された。まず、3日に設計担当者から工事内容の説明を受けた。工事では、敷地面積約1,305m<sup>2</sup>に対し、木造2階建て（1階床面積約669m<sup>2</sup>）の建物が建設される。掘削を伴うのは基礎工事である。全体は、いわゆる「布基礎」によるもので、最大幅0.75m、深度0.45mが掘削される。さらに、これ以上の掘削が計画されているものとして、ポンプ室（約5.0m×約3.6m=約18m<sup>2</sup> 深度1.7m）・昇降機（E V・D W 約1.5m×約1.5m=約2.3m<sup>2</sup> 深度0.8m 各1ヶ所）・浴室（基礎部分のみ 幅0.75m 深度0.95m）・基礎梁の一部（幅1.5m 深度0.45m）がある。また、既存建物の基礎撤去や植栽の抜根から工事を始めるが、この作業によってもある程度の掘削が伴う。

9日、現地にて設計担当者を含む事業主体者と協議を行った。試掘調査を実施する場合、工事の掘削深度内における遺跡の有無を確認することが目的となる。布基礎部分のみであれば、深度も大きくないことから、人力による発掘も想定した。しかし、事業主体者側からは、施工位置に既存の基礎や植栽などがあるため、人力では困難とされていた。そのため、やはり重機を使用した試掘発掘を検討することとした。今回の工事では、ポンプ室部分の深度1.7mが最大深度となるため、その深度まで発掘して状況を確認することが考えられる。そして、その場合は建物の強度などの関係から、別地点の掘削を求められたので、その地点について明示してもらった。

10日、重機を使用した試掘調査を実施することについて、事業主体者・土地所有者といった関係者から同意を得た。早速、調査スケジュールを調整したところ、同月22日の実施となった。市教委では2月18日付け教総第615号で試掘調査の着手を新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略）教育長へ報告した。調査は予定どおり開始され、同日中に終了した。調査の内容・結果については、同月26日付け教総第615号の2で県教委教育長へ、同日付け教総第619号で事業主体者へそれぞれ報告した。



第8図 春日1丁目地点試掘調査対象区域



第9図 春日1丁目地点試掘調査試掘坑配置図

第10図 春日1丁目地点試掘調査  
基本層序柱状模式図  
(S = 1 : 20)

## 2 調査の概要

### 1) 調査の目的と方法

今回の調査の目的は、工事で影響が生じる遺跡の有無について確認し、今後の取扱いについて判断するため資料を得ることにある。施工区域および周辺には周知の遺跡は所在していない。春日地区は柏崎砂丘上にあり、地表面下には厚い砂丘砂層が堆積していると考えられる。しかし、この地区では本格的な埋蔵文化財の調査が実施された例はあまりなく、地下の遺跡に関する資料・情報はほとんどない状態にある。さらに、一帯が宅地化されることによって、詳細な地形観察や分布調査が難しい。そのため、試掘調査を実施し、地下の状況について把握することとした。

具体的な方法としては、0.15m級のバックホーを使用して敷地内に設定した試掘坑を発掘する。工事で最大となる掘削深度は、ポンプ室部分の1.7mであるため、試掘坑で確認するのは、深度1.7m付近までとする。試掘坑の位置については、本来はポンプ室部分がふさわしかったが、事業主体者側との協議で示された位置（ポンプ室部分の近位置）に設定することになった。

### 2) 調査の経過と試掘坑の概要

試掘調査は、平成22年2月22日に実施した。降雪がしばらく続いていたが、数日前から穏やかな天候となり、施工区域における積雪もだいぶ少なくなっていた。調査員は担当を含む2名で、調査は半日足らずで終了した。試掘坑は1ヶ所（1.5m×2.7m）で、面積は約4m<sup>2</sup>である。これは敷地面積約1,305m<sup>2</sup>の約0.3%、建物面積約669m<sup>2</sup>の0.6%に相当する。

当日は午前のうちに重機等を搬入し、午後から調査に着手した。施工区域には、調査員と重機のオペレーター等が赴いた他、事業主体者側（設計担当者）が立会った。試掘坑の位置を確認した後、簡単に除雪して発掘を開始した。

深度約0.4mまでは黒褐色砂層（第I層）となっていた。締まりがややあったが、タイルや木根が比較的多くみられた。これは表土層であり、搅乱を受けているものと判断された。約0.4m以下は、褐色の砂丘砂層（第II層）となっていた。深度0.8m付近で湧水があり、その上半は酸化傾向の褐色砂層（第IIa層）、下半は弱酸化傾向の灰褐色砂層（第IIb層）となっていた。しかし、このような差異があるものの、砂丘砂層は深度約1.7mまで続いている、ほかに遺物包含層などは確認されなかった。遺構・遺物も検出されていない。

最大の工事掘削深度までに遺跡の痕跡がみられなかったことから、今回の工事で影響を受ける遺跡はないと判断された。湧水によって試掘坑は崩落を続けていたので、取り急ぎ記録作業を行った。その後、関係者に概要を説明し、埋め戻しを行った。調査は埋め戻しを確認してもらった後に終了とした。

## 3 調査のまとめ

今回の試掘調査では、遺跡の痕跡を確認することはできなかった。しかし、表土層は搅乱を受けているが、春日地区における柏崎砂丘上での人々の歴史はどのくらいまで遡ることができるのか、また砂丘のさらに深い位置に埋没している遺跡はあるのか、といった課題が考えられるであろう。

## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次）

－小規模多機能型居宅介護施設工事に係る試掘調査－

### 1 調査に至る経緯

柏崎市鶴川地区は、市街地から南へ約14kmの位置にある山間地である。地形的には、鶴川上流域の盆地状地形にある。農林水産省 北陸農政局 柏崎周辺農業水利事業所を事業主体とする柏崎周辺（二期）農業水利事業は鶴川地区でも計画が進められており、事前の埋蔵文化財に関する協議も行われている。鶴川地区における同事業の内容は、市野新田ダムの新設および関連する諸工事である。埋蔵文化財の試掘調査・確認調査は平成20年度から実施されており、今回の調査が第2次となる。第2次調査では鶴川地区的うちの女谷地区が対象となった。女谷地区では周知化された遺跡が複数存在しており、これらを「女谷遺跡群」と仮称することとした。なお、第1次は市道柏崎21-132号線付替工事に係る試掘調査である。調査の内容については、既刊報告書【柏崎市教委2010d】を参照されたい。

幹線導水路工事 柏崎周辺（二期）農業水利事業のうち、幹線導水路工事はおもに現道下に導水管を埋設するもので、延長4,460.4mの国道・市道・林道で実施される。導水管は、下流側に0.55mとなる区間（延長562.7m）がある以外は、大半が径0.7mである。掘削深度は2.15～2.50m、掘削幅は1.8mが標準であるが、用水管を併設する区間は幅2.3mとなる。

導水路の具体的な路線としては、ダム接続部を始点とし、市道柏崎21-132号線・同21-141号線・同21-136号線・国道353号線・市道柏崎21-214号線・林道棚入線・市道柏崎21-301号線・同21-2号線を通過して鶴川への注入地点へ接続する。ただし、第2次調査について協議している段階では、注入地点および付近の路線についての計画は確定されてはいない。

今回の第2次調査で対象としたのは女谷地区的施工区域（市道柏崎21-132号線・同21-141号線・同21-136号線）である。

**第2次調査に至る経緯** 柏崎周辺（二期）農業水利事業に係る埋蔵文化財に関する協議は、平成15年度から開始している。平成15年11月25日、柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）は市の担当部署である産業振興部 国営土地改良事業推進室（現 国営土地改良事業室）を交えて事業主体者との協議を開始し、幹線導水路工事についても説明を受けた。その後の協議は市道柏崎21-132号線付替工事が中心となっていたが、平成16年5月20日・6月10日に幹線導水路工事についての協議を行った。内容は、路線の変更に伴うものである。それまでは市道柏崎21-132号線・同21-141号線から直線的に進んで国道に至るものであったが、交通量や利用状況、さらには地域貢献策といった理由により、前述のような高原田集落のある丘陵沿いを通過する路線となつた。変更前の路線は井上玄場遺跡が隣接していたのみであったが、変更後の路線は高原田遺跡の範囲内も通過する。市教委はこれに対応していく必要が生じた。しかし、事業全体に進捗がみられなくなったことから、埋蔵文化財に関する協議も実質的には中断となった。

平成20年10月6日、協議が再開され、事業主体者および市国営土地改良事業室から改めて事業の説明を受けた。そして、事業主体者からは、先行して工事を行う市道柏崎21-132号線・同21-141号線・同21-136

号線の区間（延長約1.5km 施工面積3,520m<sup>2</sup>）についての調査が依頼された。そして、施工前には確認調査が必要となるが、現道部分の調査であることから、地元の理解と事業主体者からの協力を得ながら進めることなどを確認した。翌7日、現地を確認し、調査の方法などを具体的に検討した。同月17日・20日・29日、調査の方法や日程などに関して協議や連絡があったが、最終的に事業主体者からは平成21年度の実施を依頼された。21年4月6日に協議した段階では稲刈り後の実施とされたので、市教委はその準備を進めていたが、10~11月に別件の発掘調査を急きよ実施することとなり、日程を変更せざるを得なくなってしまった。8月20日、この変更に対応するための協議を事業主体者と行い、改めて事前準備や調査方法などを確認した。11月11日、事業主体者からは22年3月上旬の実施が求められた。そして、確認調査に係る重機の提供や道路の復旧は事業主体者にて担当することとなり、諸手続きを進めてもらうこととなった。さらにその一方では、発掘調査が必要となった場合の対応などを具体化させていった。平成22年2月10日、調査は3月1日~12日の10日間で実施することや調査方法の最終的な打合せを事業主体者と行う。

事務的な流れとして、平成20年10月7日付け20柏事第263号で事業主体者から正式に埋蔵文化財の調査が依頼された。そして、平成21年10月5日付け21柏事第87号で事業主体者から高原田遺跡と井上玄場遺跡についての文化財保護法第94条の規定に基づく通知が提出された。市教委は同月19日付け教総第582号の2・同第583号の2でこれを新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略）教育長へ送付したところ、同月26日付け教文第926号・第925号で県教委教育長から確認調査を実施する旨の通知がなされた。確認調査については、平成22年2月24日付け教総第617号で着手を県教委教育長へ報告した。調査は予定どおり3月1日から開始され、8日に終了した。調査の結果は同月12日付け教総第617号の2で県教委教育長へ報告した。高原田遺跡と井上玄場遺跡の取扱いについては、平成22年3月12日付け教文第926号の2・同第925号の2で県教委教育長から通知されたので、市教委は同月25日付け教総第582号の6・同第583号の6で事業主体者へこれを伝達した。

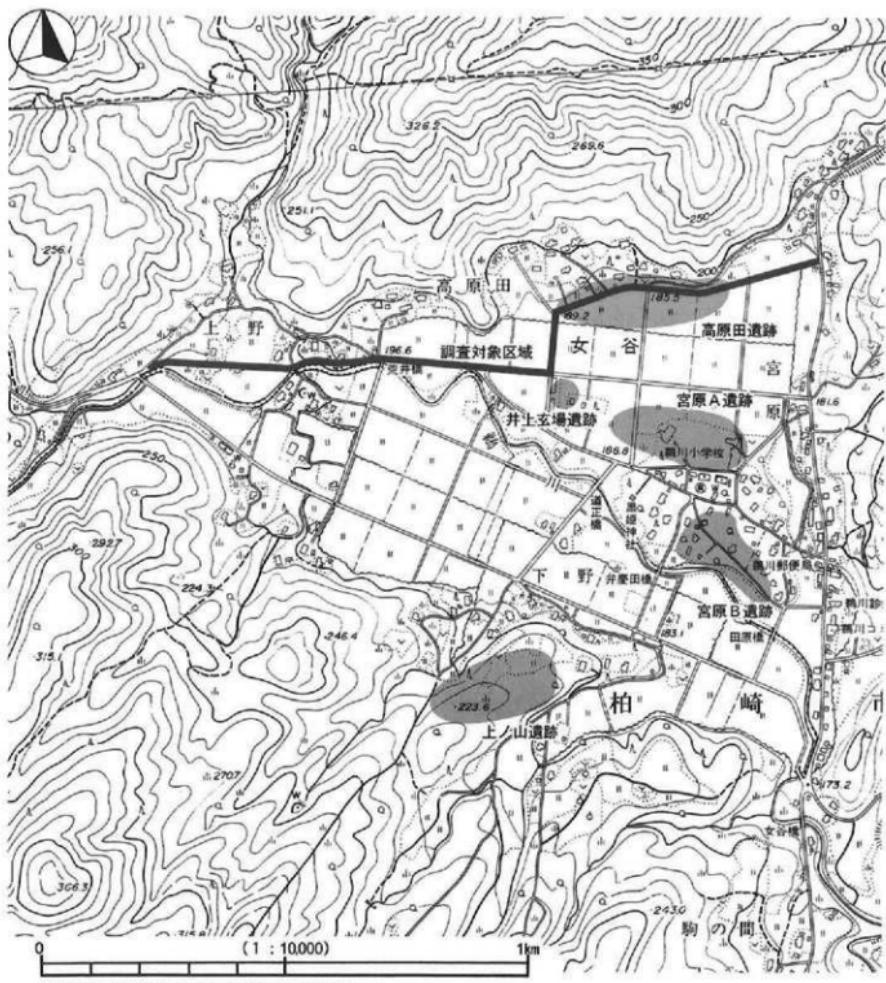
## 2 女谷地区の環境

### 1) 地理的環境と遺跡の立地

女谷地区を含む鶴川地区は、柏崎平野の南西端、鶴川（二級河川）上流域にあたる。北から西を米山に連なる山塊、東から南を黒姫山（889.5m）・鶯の巣山（623.9m）・兜巾山（676.2m）・尾神岳（757.0m）といった山々に囲まれた盆地である。西側の地質は米山の安山岩質溶岩・同質火山碎屑岩であるが、その他は駒ノ間層（魚沼層）に分類される〔阿部1990〕。

女谷地区的盆地（以下、「女谷盆地」と仮称）は、東西約1.4km×南北約1.0km、おおむね三角形状を呈している。尾神岳を水源として市野新田地区を流れる鶴川は、南北から迫る尾根の狭い谷間を抜けると、やがて扇状地状に東南東方向へ開けていく。これが女谷盆地の西端である。鶴川は、蛇行しながら小河川を合流させ、中央から南東方向へと盆地を抜けしていく。

遺跡は、女谷盆地の東半部（下流側）に分布している。具体的には、左岸の段丘上に井上玄場遺跡、台地上に宮原A遺跡・宮原B遺跡、丘陵裾部に高原田遺跡、そして右岸の丘陵部に上ノ山遺跡がみられる。井上玄場遺跡はあまり明確ではないが、これ以外は周辺よりも高地であり、集落などの立地には適したものと考えられる。



【原図】柏崎市街図其6 1:10,000 1996年調製

第11図 女谷遺跡群等第2次確認調査対象区域と周辺の遺跡

## 2) 女谷地区の遺跡と歴史的環境

女谷地区を含めた鶴川地区では、文献史料や考古資料があり多く伝えられていないが、現在知られている遺跡や『鶴川の話』〔高橋1986〕・『鶴川の話Ⅱ』〔高橋1995〕などをもとにして、女谷地区の歴史を概観してみたい。

**縄文時代～古代** 女谷地区において、人間の生活の痕跡が認められるのは、今のところ縄文時代からである。現在周知化されている縄文時代の遺跡としては、宮原A遺跡・宮原B遺跡・高原田遺跡・上ノ山遺跡がある。宮原A遺跡では、前期後葉（諸磯系）と考えられる深鉢や後期前葉（三十稻場式）の深鉢のほか、磨製石斧などが出土している〔宇佐美ほか1987〕。同遺跡については、平成8・10年度に市教委が土木工事等に係る確認調査を実施しているが、その調査対象区域では遺構・遺物等の検出には至らなかった〔柏崎市教委1997・1999〕。また、新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードには、宮原B遺跡からは縄文中期の土器、上ノ山遺跡からは石斧・石鎌、高原田遺跡からは建物跡・踏跡、磨製石斧（第12図1）・磨石（同2）が発見されていることが記載されている。今回の第2次調査で対象となる高原田遺跡の磨製石斧は、形態的な特徴から後～晩期のものと考えられるので、該期の集落があった可能性がある〔伊藤ほか2002〕。また、新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、井上玄場遺跡からは昭和46年の土地改良の際に土器が多量に出土したとされるが、実態は明らかではない。

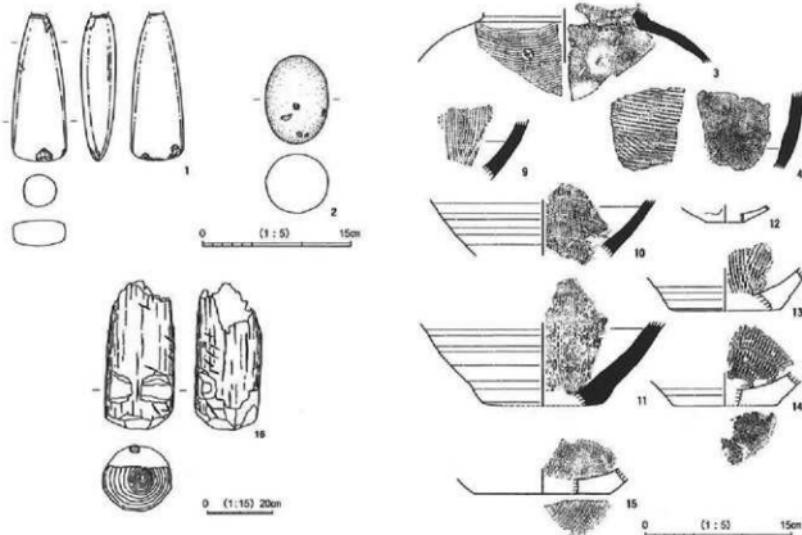
その後、弥生時代～古代の資料は非常に稀薄である。宮原A遺跡からは須恵器裏の小片が若干採集されているが〔宇佐美ほか1987〕、この他に資料は知られていない。

**中世** 福川中流域には鶴河荘が成立するが、女谷地区を含む上流域ではどのような支配や土地制度が行われていたのか、それを伝える資料はない。中世の遺跡は、今のところ高原田遺跡・宮原A遺跡が知られる。高原田遺跡では、珠洲焼など（第12図3～11）が採集されており、13世紀前葉～14世紀前葉および14世紀後葉～15世紀中葉の製品がみられた〔伊藤ほか2002〕。これに対し、宮原A遺跡の珠洲焼は15世紀前半以降とされており〔宇佐美ほか1987〕、高原田遺跡の資料よりも時期が下る。また、觀音寺（高麗田毘沙門堂）の毘沙門天立像は中世後期の作との説がある。そのほか、女谷地区的近辺では、宮ノ下遺跡（市野新田）では土器や五輪塔、小槌ゴリンゴ遺跡（阿相島）では珠洲焼の破片、九万堂遺跡（兜金山と尾山岳の中間）では金属製の仏像などが発見されている。

なお、女谷地区は、昭和51年に国の重要無形民俗文化財に指定された「綾子舞」の伝承地として知られている。綾子舞の由来としては、京都北野神社の巫女文子が舞ったものが伝わったとするもの、永正の乱（1507年）で敗れた守護上杉房能の室綾子が伝えたとするもの、さらに出雲阿国（1572-?）もしくはその模倣者の座によって伝えられたとする説がある。いずれにしても中世後期～近世初頭に起源を求めるが、これを裏付けるように、構成や衣装・楽器・所作などには中世的な要素が多く含まれている〔渡邊1996〕。

**近世** 『柏崎市史』〔新沢ほか1992〕で近世の女谷村の状況をみると、1598年から春日山藩領（堀氏）、1607年から福島藩領（堀氏）、1610年から福島藩領（松平氏）、1614年から高田藩領（松平氏）、1616年から長峰藩領（牧野氏）、1618年から高田藩領（松平氏）、1798年～1815年には与板藩領（井伊氏）にもなっていたようであるが、1681年からは幕府領となって幕末へ至る。石高は、「越後中将光長公領覚」（1683年）では428石余、「元禄郷帳」（1702年）では428石余、「天保郷帳」（1834年）では751石余となっている。家数は100軒で（「郡中惣高家数取調写帳」1868年）、頸城・莉羽境の番所が4ヶ所あったとされる（「越州四郡信州逆木郷高帳」1679年）。

なお、「牧野氏知行目録」（1618年）と「天和檢地帳」（1683年）との比較により、女谷村（414石余）は女谷村・折居村・清水谷村・石黒村・峯村に分村したとされる〔新沢1992〕。また、「正保越後国絵図」（新発田市立図書館蔵 1645年）にも女谷村（181石余）のほかに駒野間村（8石余）・市野新田（130石余）・折居村（56石余）・石黒村（42石余）・嶺村（66石余）がある。周辺の村々は、17世紀中～後葉に



【原図】伊藤ほか2002

第12図 高原田遺跡採集遺物

かけて徐々に再編されていったものと考えられる。

1889年（明治22）、女谷村は市野新田・清水谷村・谷川新田と合併して刈羽郡女谷村となる。その後、1901年（明治34）には刈羽郡鶴川村大字女谷、1956年（昭和31）には刈羽郡黒姫村大字女谷、1968年（昭和43）には柏崎市大字女谷となって現在に至る。

### 3 調査の概要

#### 1) 調査の目的と方法

今回の調査の目的は、幹線導水路工事（掘削深度2.1～2.5m）で影響が生じる遺跡について確認することにある。施工区域は高原田遺跡の範囲や井上玄場遺跡の隣接地を通過することから、この周辺での調査が特に必要である。それ以外の区域では、新発見の遺跡の有無について確認する。なお、平成21年3～5月、調査に先立って周辺の現地踏査を実施しているが、遺物の分布状況等は明確ではなかった。

発掘する位置については、調査対象区域が生活道路であり、一般的の民家にも近接していることから、事業主体者が設定した位置にて試掘坑を設けることとした。試掘坑は、掘削可能な範囲において20mもしくは40mの間隔で40ヶ所（TP-Na01～40）が設定された。規模は幅1m×延長3mである。

事業主体者との協議により、今回の調査で使用する重機をはじめ、舗装の切断や道路の復旧、通行の誘導などは事業主体側が担当することとなった。あらかじめ発掘する試掘坑を指示し、事前に舗装の切断をしておいてもらう。そして、各試掘坑の調査後は、道路の安全性を保持するため、その日のうちに復旧してもらうこととした。

## 2) 調査の経過と試掘坑の概要

調査は、平成22年3月1日～8日（延べ6日間）に実施した。調査員は担当を含む3名（延べ18人）である。発掘した試掘坑（1.0m×3.0m=3.0m<sup>2</sup>）は合計24ヶ所で、面積は約72.0m<sup>2</sup>である。これは施工面積約3,520m<sup>2</sup>の約2.0%にあたる。

3月1日（月）：TP-No.13～No.19 曇天で、夕方から雨天の予報であった。午前は日差しもあったが、午後から気温が大きく下がり、小雨も混じった。

以前からTP-No.13・15・17・19・21・23を発掘することで事業主体者と打ち合わせていたので、すでに舗装にはカッターが入った状態となっていた。初日は井上玄場遺跡に近接するNo.13から着手し、その後は高原田方面へと北上することとした。

TP-No.13では、深度約0.4mまでは路盤層（第0a層）、約1.2mまでは盛土層（第0b層）となっていた。盛土層は、混合した粘土層が主体で、木片や大小の礫を含んでいる。これを除去すると、やや砂質の暗緑灰色粘土層（第IV層）となった。これは自然堆積層と判断されたが、深度約1.4mでやや色調が明るくなかった。東側の壁面には、この層から落ち込むピット状の遺構が確認された。これは稻架木の痕跡とみられる。試掘坑の南端をさらに掘り下げたところ、深度約1.7mで暗褐色となり、深度約1.8mで褐色となった。いずれも粘土層である。遺物は出土しなかった。遺跡の痕跡が得られなかったことから、20m北側のTP-No.14の発掘を省略し、さらに20m先のTP-No.15へ進むこととした。以後も同様とする。

TP-No.15では、路盤層・盛土層を経て、深度約1.3mで暗緑灰色砂層（第VIIa層）となった。さらに深度約1.6mでは暗緑灰色礫層（第VIIb層）となった。河川跡と判断し、発掘はこの深度までとした。

TP-No.17では、路盤層・盛土層を除去すると、深度1.4mで黒灰色礫層（第VIIb層）となった。礫は20～40cm大である。

TP-No.19では、深度約1.3mで既設管に遭遇した。これ以上発掘することができない状態であり、以後の試掘坑も同様と考えられる。事業主体者に連絡したところ、1mずらした位置で発掘することになった。しかし、舗装の切断から準備が必要となるため、調査は明朝から再開することになった。

3月2日（火）TP-No.19～No.27 曇天で気温が低く、朝や昼に小雨が降る時間帯もあった。

既設管がみられたことで再発掘となったTP-No.19から着手する。深度約1.2mまでは路盤層・盛土層となっていた。これらを除去すると、暗灰色粘土層となつた。10cm前後の礫、径5mmの木炭が多く含む。盛土層とも異なっているため、現道以前の旧耕作土層（第I層）と考えられた。深度約1.5mで径3mmの木炭が多く混じる褐色粘土層（第IV層）となつた。さらに、深度約1.8mで青灰色礫層（第VIIb層）となつた。礫は20～30cm大である。

TP-No.21では、深度0.8～0.9mで粘土層（第IV層）となつた。上面で遺構を精査したが、確認されなかつた。粘土層は1.3mほど堆積しており、上から黄灰褐色・灰褐色・褐色・褐色+青灰色・暗青灰色となつていて。上層ほど粘性があり、縮まりはやや弱い。北から南すなわち丘陵地側から沖積地側への傾斜が明瞭にみられた。下層はやや砂質を帶びている。さらに掘り下げると、深度約2.2mで褐色腐植土層（第V層）となつた。これは工事掘削深度である2.5m以下にも続いていた。

TP-No.23では、盛土層が深度約2.1mまで続いていた。褐色粘土層（第IV層）上面で遺構を精査したが、確認されなかつた。深度2.5m以下にも続いていた。

TP-No.25では、盛土層が深度約1.6mまで続いていた。盛土層には木片を含む腐植土や礫などが混じ

っていたが、その中に深度約1.1m付近で肥前磁器皿の破片（第17図3）が出土した。盛土層を除去すると、明褐色礫層（第VIIb層）となった。これは深度2.5mまで続き、橙色砂質土層（第VIIc層）となった。同層の上面で遺構を精査したが、確認されなかった。

TP-No.27では、路盤層・盛土層を経て、深度1.3~1.4mで明褐色粘土層（第IV層）となった。0.5~1cmの木炭がやや多く混じる。上面で遺構は確認されなかった。この層の下層付近はやや酸化していたが、基本的には同じ層とみられる。深度約2.3mで灰褐色砂質土層（第VIc層）となった。

TP-No.25・27付近は、高原田遺跡が周知化される原因となった遺物（第12図）が発見された地点に近い。しかし、遺跡の痕跡は得られなかつたので、後日TP-No.26を発掘して検討することとした。

3月3日（水）：TP-No.29~No.36-2 朝から雨天が続いたが、予報どおり午後からは一時雨天となつた以外は晴天となり、日差しもあった。

TP-No.29では、路盤層下の深度0.8~1.6mまでは、上から明褐色・暗褐色の粘土層となつた。この粘土層は木片などの腐植物が多く混じることから、当初は腐植土層（自然堆積層）としていた。しかし、礫が少ないことを除けば、他の試掘坑の盛土層におおむね類似しており、最終的には盛土層（第0b層）と判断した。盛土層を除去すると、明灰色粘土層（第IV層）となった。これは旧水田の床土とも推測したが、上面付近に腐植物が混じっているため、水田に関するとは考えにくい。上面では遺構は確認されなかつた。その後、深度約2.3m以下で黄灰色粘土層となつた。やや砂質を帯びているが、基本的には上層の明灰色粘土層と同質の土層と考えられる。

TP-No.31では、深度1.6~1.7mまでは盛土層となつた。それ以下は、青灰色砂礫層（第VIIc層）となつた。

TP-No.33では、深度1.8~1.9mまで盛土層となつた。他の試掘坑と異なる点として、深度1.3mまで赤灰色となつたことである。土壤改良された際の痕跡とも考えられる。これを除去すると、やや砂質を帯びた暗青灰色粘土層（第IV層）となつた。この層は上面が西側へ傾斜していた。北側に尾根が張り出していることに伴つていて、遺構は確認されなかつた。その下は厚さ0.3mほどの腐植土層（第V層）を挟み、深度2.2~2.3mで暗青灰色砂層（第VIIc層）となつた。

TP-No.35では、深度1.2m以下に60~80cmの大型の礫が多く含まれていた。これは盛土層と考えられるが、礫を除去することで試掘坑の壁面がえぐられ、危険が生じたことから、深度2.1mで発掘を断念した。しかし、この段階でも盛土層が続いていたことから、旧地形の標高は周囲よりも低かったことが想定される。北側には北東方向からの沢がみられるので、沢の深部付近と考えられる。

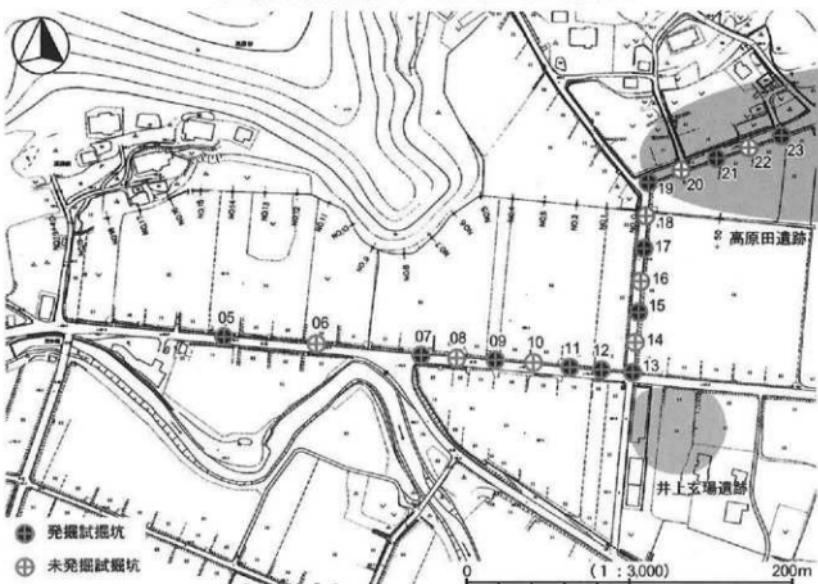
TP-No.36-2は、前後の試掘坑のバランスを考慮し、TP-No.36・No.37の中間に設定した。深度1.8~1.9mで青灰色粘土層（第IV層）となつたが、遺構は確認できなかつた。その後、厚さ0.4mの腐植土層（第V層）を経て、深度約2.3mで黄褐色粘土層（第VI層）となつた。やはり遺構は確認されない。

3月4日（木）：TP-No.38~No.40・No.26・No.28 終日曇天であり、気温もさほど低くはならなかつた。

TP-No.38では、深度約0.6mまでは上から灰褐色・褐灰色粘土層となつた。しかし、0.7~1.1mで検出された褐灰色粘土層は締まりが弱く、若干異なる層であることから、区画整理以前の旧耕作土層（第I層）と考えられた。そして、深度0.8~0.9mで褐色の腐植土層（第V層）となつた。径5mmほどの木炭や木片を多く含む。この層は深度1.3~1.4mで暗褐色となり、木片は引き続き多いが、木炭はほとんどなくなつた。さらに、深度約2.2mで暗青灰色粘土層（第VI層）となつた。腐植土層の木片がもぐつてゐるため、平面を観察すると、遺構らしくみえる部分があつたが、結果的に遺構は確認されていない。



第13図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図(1)

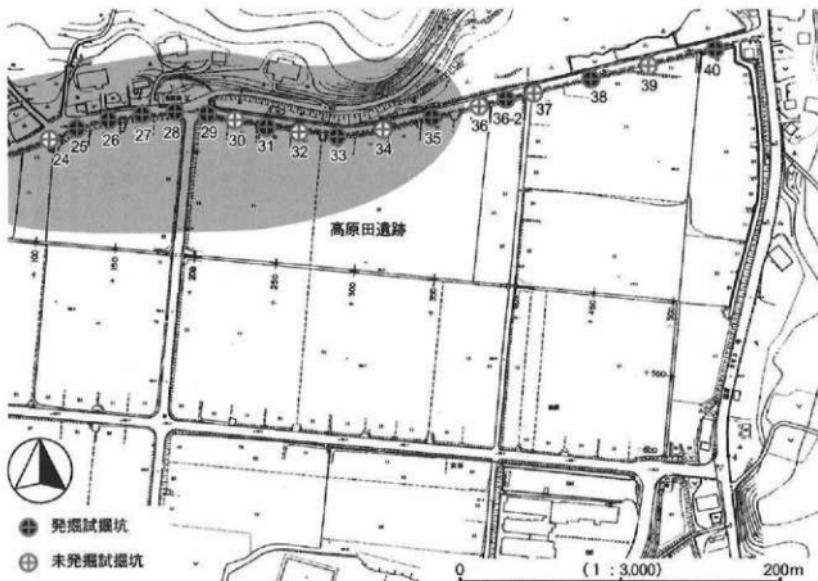


第14図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図(2)

TP-No.40では、深度0.9~1.0mまでは、上から灰褐色・褐灰色・灰褐色の粘土層となっていた。これらは盛土層（第0b層）である。これを除去すると、締まりの弱い灰褐色粘土層となった。TP-No.38からの延長を考えると、この層も旧耕作土層（第I層）である可能性がある。深度1.0~1.1mになると、灰褐色粘土層（第IV層）となった。深度1.2~1.3mになると明褐色粘土層、深度1.9mからはシルト質の橙色粘土層となった。これらは灰褐色粘土層とは異なり、やや砂質を帯びた粘土層（第VI層）である。

ここで、過去に遺物（第12図）が採集された地点に戻り、TP-No.26・No.28を発掘することとした。TP-No.26では、路盤層を除去すると、深度約1.1mまでは上から暗褐色（礫あり）・暗褐色（礫なし）の粘土層となっていた。これは盛土層（第0b層）とみられる。その下の暗褐色粘土層は、締まりが弱く、旧耕作土層（第I層）の可能性がある。しかし、盛土層との差異は明瞭ではない。深度約1.2mになると、明褐色粘土層（第IV層）になった。5mm前後の木炭や1mm以下の木片が多く混じる。深度1.6~1.7mになると青灰色砂が混じるようになり、深度2.2mでやや砂質を帯びた橙色粘土層となった。遺構は確認されなかった。

TP-No.28では、深度約1.2mまでは盛土層になっていた。盛土層の上層は、ほとんどが赤灰色を呈する部分（改良土か）だった。下層は黄褐色を呈している。盛土層を除去すると粘土層（第IV層）になった。上層の暗灰褐色粘土層には、腐植土が2枚の層状に堆積していた。深度約1.3mからは灰褐色粘土層となつた。この2層には、5mm前後の木炭と1mm以下の小礫がやや多く混じる。そして、深度約1.5mになると、砂質を帯びた青灰色粘土層となつた。これは、還元化したために色調が異なるが、TP-No.26の最下層と同じ土層と思われる。遺構は確認されていない。



第15図 女谷遺跡群等第2次確認調査試掘坑配置図(3)

3月5日(金) : TP-No.12~No.07 終日小雨が降り、風もあったので、気温の低さを感じる1日であった。本日から再び井上玄場遺跡付近へ戻り、西側へ進むこととした。

TP-No.12では、深度約1.3mまで盛土層となっていた。その下は粘土層(第IV層)となっている。上面で遺構を確認したが、検出されなかった。上層は灰褐色粘土層、深度約1.9mで腐植土が混じる粘土層を経て、深度2.0mでやや砂質を帯びた暗橙色粘土層となった。なお、試掘坑の北側で、既設管が検出されたので、南側をパケットの幅(約0.65m)で発掘した。しかし、既設管の周囲は砂で埋められているため、最終的には北側の壁の一部が崩落した。

TP-No.11でも、北側を残して発掘した。深度0.9mまでは、盛土層となっていた。盛土層を除去すると、灰白色粘土層(第IV層)となり、深度1.0~1.1mからは暗青灰色砂層(第VIIa層)となった。ここで、ピット状の遺構が1基検出された。壁面にみられたもう1基で確認したところ、粘土層(第IV層)上面から掘り込まれていることがわかった。覆土は黒色粘土を主体とするが、青灰色シルトのやや大きなブロックが混入している。底部が尖る形状や盛土層直下であることから、土地改良前の稻架木の痕跡と考えられた。暗青灰色砂層は深度約2.1mまで続いている。やはり北壁が崩落したことから、これ以下の調査については断念した。

TP-No.09では、深度約0.9~1.0mまでは盛土層となっていた。盛土層の下部約0.2mに多くの礫が集中していた。その直下はやや締まりのない暗褐色粘土層で、旧耕作土層(第I層)と考えられる。深度1.0~1.1m以下は砂質を帯びた暗青灰色粘土層となった。深度1.2mになるとやや暗色(暗灰色粘土層)となり、深度約2.2mになると、暗灰色礫層(第VIIb層)となった。礫は径10~30cmである。試掘坑西側の一部に酸化色の橙色砂礫層がみられた。

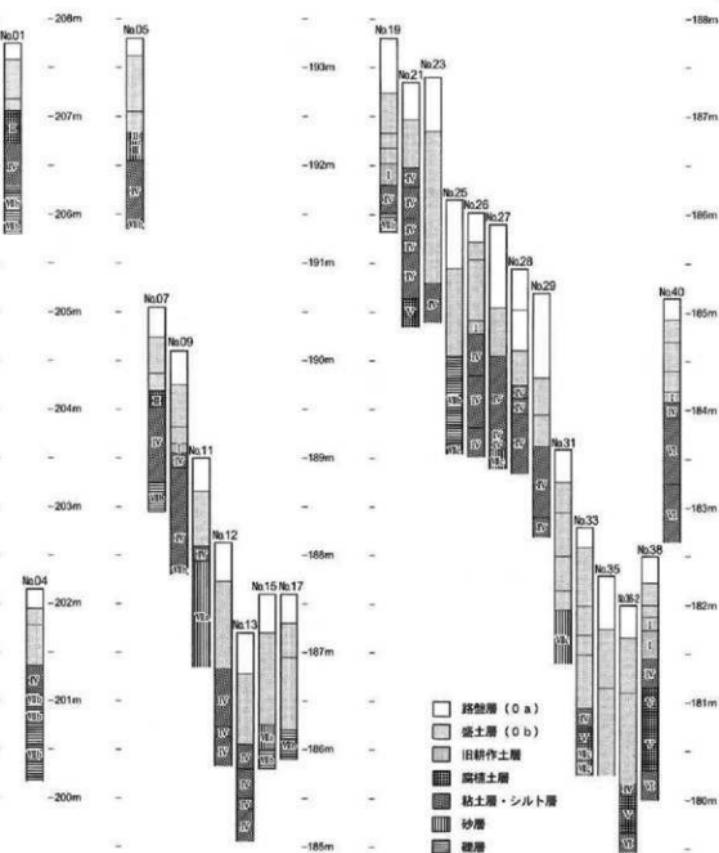
TP-No.07では、深度0.8~0.9mまでは盛土(盛砂)層となっていた。これを除去すると腐植土層(第II層)となったが、周囲にはみられず、部分的のようである。深度約1.0mになると、砂質を帯びた暗青灰色粘土層(第IV層)となり、深度1.9mで暗青灰色礫層(第VIIb層)となった。礫は20~30cm大である。

3月8日(月) : TP-No.05~No.01 週末、現地では数cmの積雪があったようである。本日も小雪が降る気温の低い日であった。

TP-No.05では、深度約0.9~1.0mまでは盛砂層・盛土層となっていた。その下は、灰色粘土が混じる黒灰色腐植土層(第II層)で、木片や径5mmほどの小礫が多く混じる。上面からピット状の落込みが確認された。径20cmほどで、上面付近が褐色、他が黒色の粘土を覆土とするが、盛土層直下であることから、近代以降の所産であろう。この腐植土層は厚さ0.1mほどで、その下は暗青灰色砂質土層(第III層)となり、深度1.2~1.3mで暗(青)灰色砂質粘土層(第IV層)となった。遺構は確認されていない。深度1.8~1.9mからは暗(青)灰色礫層(第VIIb層)となった。礫の大きさは20~60cmである。

TP-No.04では、深度約0.8mまでは砂・粘土・礫などによる盛土層となっていた。この層を除去すると、青灰色砂質粘土層(第IV層)となった。遺構は確認されていない。深度約1.0mからは青灰色礫層(第VIIb層)となった。礫の大きさは5cmほどである。さらに深度1.2~1.3mでは赤褐色を呈する礫層となり、さらに深度約1.4mからは橙色礫層となった。礫も大きさも10~20cmほどとなる。

TP-No.01では、深度0.7mまでは盛土層となっていた。これを除去すると暗灰色腐植土層(第II層)となる。深度1.0m付近からは褐灰色砂質粘土層(第IV層)となり、深度1.4~1.5mからは青灰色礫層(第VIIb層)となった。礫は30cmほどの大きさである。さらに深度1.8~1.9mほどからは、赤褐色礫層となつた。礫は大きく、30~100cm大のものがみられた。



第16図 女谷遺跡群等第2次確認調査土層柱状模式図

### 3) 層序の概要

路盤層（第0 a層）・盛土層（第0 b層）以外の土層を第I～VII層に分類した。第I層：盛土以前の旧耕作土層、第II層：腐植土層、第III層：砂～シルト層、第IV層：粘土層、第V層：腐植土層、第VI層：粘土層、第VII a層：砂層、第VII b層：硬層、第VII c層：砂層である。このうち、第IV層・第VI層は比較的安定して堆積している粘土層であり、上面で遺構の精査を行っている。上流側では第IV層よりも上位に腐植土層・砂層（第II・III層）があるのに対し、下流側では下位に腐植土層（第V層）、さらに第VI層の下位に砂礫層（第VII層）がある。流路・湿地・陸地を繰り返した痕跡であろう。



第17図 女谷遺跡群等第2次確認調査出土遺物

#### 4) 出土遺物

6点の遺物(1~4・a・b)が発見されている。すべて陶磁器の小破片である。いずれも盛土層からの出土で、自然堆積層からは確認されていない。このうち図化したのは4点(1~4)である。記載にあたっては、先行研究〔盛2000・野上2000など〕をもとにすると、相羽重徳氏からのご教示も得た。

1は、TP-No.38、深度1.0mから出土した。肥前磁器の皿の口縁部～胴部の破片である。型打ち技法による輪花形になっている。2は、TP-No.25、深度1.3mから出土した。肥前磁器皿の胴部下半～底部の破片である。いわゆる「初期伊万里」であり、II期(17世紀前～中葉)の製品である。内面および破断面にタール状の付着物がみられる。3は、TP-No.04、深度0.9mから出土した。肥前磁器であるが、器種は不明である。ただし、内面が無釉であることから、油壺や徳利といった袋物と考えられる。4は、TP-No.27、深度1.1mから出土した。肥前陶器碗の底部の破片である。異器手形となるタイプで、高台の器形から、III期(17世紀後半)とみられる。内面にタール状の付着物がみられる。aは、TP-No.12、深度0.8mから出土した。肥前磁器皿の小片である。bは、TP-No.35、深度0.9mから出土した。萩焼の碗の胴部である。外面には、縦方向の白濁釉そして横方向の鉄釉による「ビラ掛け」が施されている。内面にタール状の付着物がみられる。19世紀の製品である。

#### 4 調査のまとめ

井上玄場遺跡隣接地および周辺(TP-No.01～18)では、深度1.0～1.5mで自然堆積層(第II～IV層など)となった。TP-No.05・11・13ではピット状の落込みが検出されているが、遺物は出土しておらず、盛土層直下であることや埴土の状況などから、近現代の所産とみられる。この層は比較的厚かったが、深度2m付近で礫層(第V層)となった。

高原田遺跡および周辺(TP-No.19～40)では、深度1～2mで自然堆積層(第IV層など)となった。この層では、遺構は確認されなかった。さらに掘り下げるに、腐植土層(第V層)などを経て、砂礫層(第VI層)となった。

いずれも遺物は盛土層(第0b層)から近世陶磁器が出土している程度で、遺物包含層は確認されていない。したがって、明確な遺跡の存在は確認できなかった。過去に遺物が採集された高原田遺跡では、現道が昭和40年代の土地改良工事に伴って造成されたものであるが、その際に何らかの変更を受けたと考えられる。また、井上玄場遺跡周辺では、TP-No.05～13でピット状の落込みがみられた。これらは近代以降の所産と推測されるほか、既設管があるために今回の工事で新規に掘削される幅は狭小となることから、発掘調査は不要と考えられる。ただし、工事立会を行い、さらに状況を確認することとした。

## VI 城東地区（横山川第2次）

—二級河川横山川河川改修に伴う試掘調査—

### 1 調査に至る経緯

二級河川横山川は、柏崎平野を形成する主要河川のひとつである鶴川の支流である。柏崎平野の南側に接する中位段丘の沢から集まつた水流が城東地内を北西へ流れて、宮場町地内で鶴川に合流する。鶴川との合流地点に近い下流部は護岸された6m程度の川幅を保っているが、中上流部では沖積地を蛇行する旧来の川の姿を残している。この一帯は古くから鏡ヶ沖と呼ばれ、近年までは湖沼のような湿地帯が広がっていたとされる。現在、横山川周辺は水田が広がっており、一部は住宅地となっているが、豪雨の際には鶴川への排水が滞り、周囲より地盤が低い横山川周辺では浸水被害が度々起っている。このため、本格的な治水工事が進められるようになった。

平成18年度から始まった総合内水対策緊急事業は、桂橋から農道橋までの約540mの区間の河川改修工事を5ヶ年計画で行うものであった。この事業の予定範囲が下冲北遺跡に近接することから、柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）は平成21年9月に遺構や遺物の分布を把握するための試掘調査を行つたが、遺構・遺物ともに確認されなかつた。農道橋より上流部分の改修工事は、二級河川横山川河川改修事業として平成23年度から実施されることとなつた。この事業では、現河道の両岸で堤防を含めて約10m程度拡幅する計画であった。事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないものの、北側には箕輪遺跡があり、南東部では京田遺跡が隣接している。これらの遺跡の範囲が事業予定地内に及ぶ可能性があることから、事業主体者である新潟県柏崎地域振興局地域整備部と市教委が協議し、事前に遺構・遺物の存在を把握するための試掘調査を行うこととした。

事業主体者からは平成22年3月11日付け柏振地第632号で文化財保護法第94条第1項等の規定による埋蔵文化財発掘の通知が新潟県教育長宛に市教委へ提出された。柏崎市教育長は平成22年3月12日付け教総第626号の2で、事業予定地内で確認調査を実施する必要がある旨の意見を付して連達した。これを受けて、平成22年3月18日付け教文第1542号で新潟県教育長から試掘調査が必要との通知が出され、柏崎市教育長は事業主体者に伝達した。事業主体者と市教委では試掘調査についての協議はすでに行つていたため、平成22年3月17日付け教総第631号で文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を新潟県教育長へ提出し、同日から調査に着手した。

### 2 試掘調査の概要

#### 1) 調査区の概要と調査方法

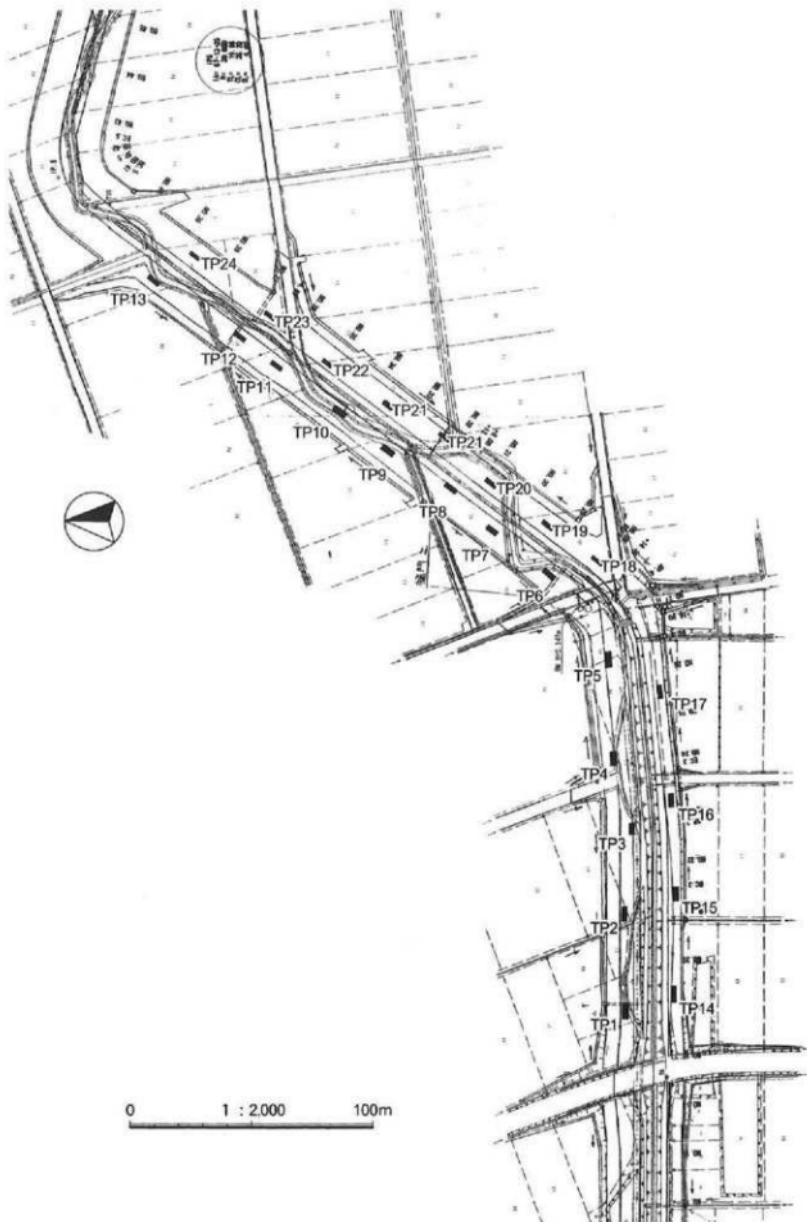
横山川改修に伴う調査は原因となる事業は異なるが、今回で2度目となる。そのため、横山川第2次調査として行った。今回の調査対象地は、第1次調査の対象地の東端となつた農道橋より東側にあたり、用地買収が完了した延長約420mの範囲とした。事業対象地はこれより東側にも続いているが、この部分に



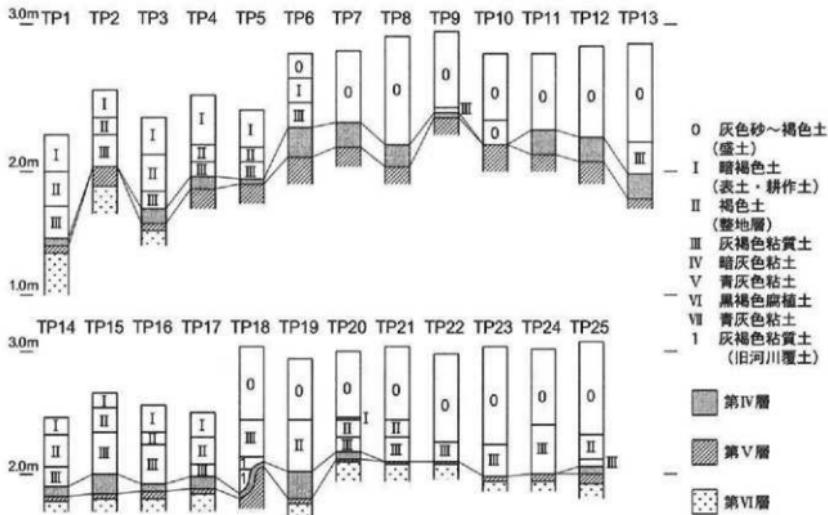
第18図 第2次試掘調査の位置と周辺の遺跡

については今後の事業の進捗状況をみて調査を行うことになった。

今回の調査対象地は、横山川が北東から南西へ蛇行した後にほぼ真西へ向かう変換点を挟んだ区間である。川の南北に隣接する水田面の標高は2.1m程度で、横山川から遠ざかる程に標高は高くなっている。現況は水田・畑・農道である。河川改修工事は横山川の両岸を拡幅するものであるため、試掘調査も両岸を行った。調査期間は平成22年3月17日・18日を行い、2班体制で両岸の調査を同時に進行した。調査トレンチの掘削は0.25m級の法面パケットを装着したバックホーによりを行い、土層の堆積と遺物の出土を確認しながら徐々に掘り下げた。トレンチの幅はパケットの幅の約1.6mで、トレンチの長さは3m程度とした。掘削深度は遺構確認面となる青灰色粘土層までを想定した。その後、人力で遺構検出面の精査や土層の堆積状況を確認して、写真撮影と断面図を作成し、トレンチ上部の標高や位置を測定した。調査対象面積の約1,343m<sup>2</sup>に対して、発掘したトレンチは25ヶ所となった。総発掘面積は240.3m<sup>2</sup>である。



第19図 城東地区試掘調査トレンチ配置図



第20図 城東地区試掘調査土層概略図

## 2) 基本層序

今回の調査で確認された土層を大きく8層に分けた。これは、前回の第1次試掘調査とほぼ同様のものであるが、層序について一部を変更した。

第0層は農道の造成などに伴う盛土層で、灰色砂や褐色土からなる。第1次調査では第II a層としたものである。第I層は現表土層で、水田耕作土なども一括した。暗褐色土が主体である。第II層は表土直下の整地層で、褐色土が主体である。第1次調査の第II b層である。これより下位の堆積が自然堆積層である。土色に若干の相違はあるが、第1次調査と同様の層序である。第III層は細かい炭化物が多く含まれる灰褐色粘質土層で、旧表土層と見られる。一部のトレーンチでは、後世の掘削により消失している。第IV層は暗灰色粘土層で、炭化物を多く含んでいる。前回の調査と同様に、遺物包含層に相当するものとみて慎重に掘削を行った。左岸側の東半部などで、堆積が消失しているところがある。第V層は青灰色粘土層で、この層の上面で遺構が検出されるものと想定した。堆積は数cm程度と非常に薄い部分が多い。第VI層は黒褐色の腐植土層である。湿地性の地形の痕跡であると考えられるものである。第V層の下位に堆積するもので、全てのトレーンチで検出したものではないが、広い範囲に堆積している可能性がある。

## 3) トレーンチの概要

今回の調査では、横山川の右岸に13ヶ所、左岸に12ヶ所のトレーンチを設定した。トレーンチ位置は、地

表の状況に影響を受けながらも、ほぼ等間隔になるように任意に設定した。現地においては両岸の作業を並行して行ったため、それぞれでトレーナー名を付けていたが、整理作業の段階で一連の番号を付して整理した。右岸側のトレーナーはTP1～TP13とし、左岸側はTP14～TP25として、西側から順次番号を付けた。結果としては、いずれのトレーナーにおいても遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。以下に、調査で確認された土層の堆積状況を述べる。

**右 岸** TP1～TP3では第V層を検出して記録作業を行った後に、再度掘り下げを行って第VI層の状況を確認した。これは、第VI層以下に遺構検出面が存在するか、遺物などが含まれているかを確認するためのものであった。結果としては、遺構・遺物ともに検出されなかった。また、第VI層の堆積が相当の深度まで及んでいることがわかったため、これ以降は第V層の上面を検出した段階で掘削を止めることにした。TP1～TP5までは、現況が水田であり、第I層から第V層までの堆積を確認することができる。TP6より東側の現況は農道である。造成のため、第I層から第III層まではほとんど掘削されている。地山とした第V層上面の標高の推移を見ると、TP1では1.4m程度で、東に向かって徐々に高くなり、最も高いTP9で2.4mとなる。ここから東に向かって標高が下がり始め、TP13では1.8m程度となる。

**左 岸** TP14～TP17では第I層から第V層までを確認することができる。TP18の第V層は東側が高くなっている、その上位に旧河川覆土とみられる灰褐色粘土が堆積している。TP18より東側の現況は農道である。造成のために大部分で第I層と第II層が消失しているが、多くのトレーナーで第III層は残存している。TP21～TP24では第IV層が確認できず、再度堆積が確認できるTP25においても極薄いものであった。第V層上面の標高の推移をみると、TP13～TP17では1.8m前後とほぼ一定で、TP18内で凹凸が確認されるが、TP19では再び1.8mとなる。TP20では2.0mと高くなり、これより東側は同様の標高でほぼ一定となる。左岸側では、いずれのトレーナーでも第V層の堆積が非常に薄くなっている、検出面の消掃中に消失してしまうような状況で、下位の第VI層が全体に広がっていることが確認された。

### 3 調査のまとめ

今回の試掘調査は、北東部にある箕輪遺跡の範囲の広がりが事業予定地内に及んでいるかを確認することを主な目的に行った。結果としては、遺物・遺構ともに検出されず、遺跡範囲が及んでいないことが確認された。箕輪遺跡は、一般国道8号柏崎バイパスの建設に伴い平成7年度から平成12年度にかけて試掘調査及び本発掘調査が行われている。このうち、平成10年度に本発掘調査が行われた地区では、弥生時代中期後半を主体とする集落跡が見つかった。遺構検出面の標高は南西方向に向かって低くなっている、遺構・遺物は標高がやや高い調査区の東側部に多く分布していた。このことから、この調査区の範囲が集落の南西端部分にあたるものと想定されている〔新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2002〕。この調査区の南西端部分の遺構検出面の標高は2.4m程度である。TP13とは約200mの距離があり、標高の差は約0.6mである。若干の凹凸はあったとしても、箕輪遺跡から南西に向かって標高が徐々に低くなっていくと想定できる。今回の試掘調査で検出した湿地性の堆積とみられる腐植土層の形成時期は明らかにできないが、湿地帯の縁辺に箕輪遺跡が立地していたものと考えられる。

横山川河川改修に伴う試掘調査は、今回の調査区の東側でも行う予定である。箕輪遺跡の推定範囲にさらに近づくとともに、京田遺跡にも近づいていく。今後の調査によって、両遺跡の範囲を見直す必要が生じることも考えられる。引き続き慎重に調査を行っていく必要がある。

## VII 総括

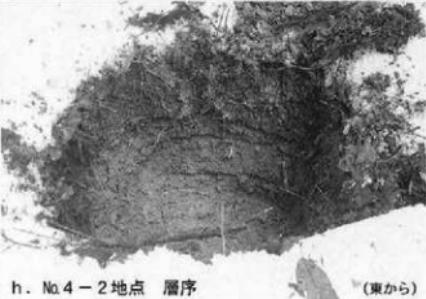
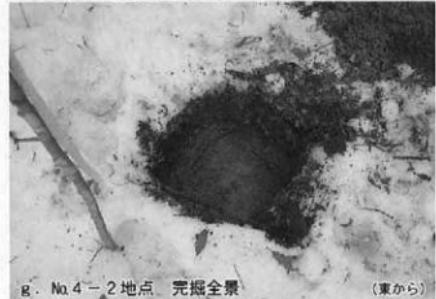
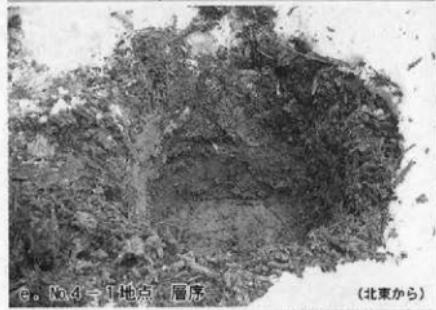
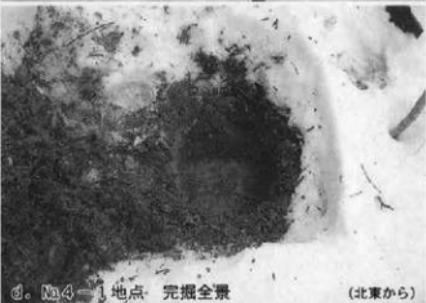
本書は、第XX期の事業として作成した報告書である。内容は、平成21年度後半期の柏崎市発掘調査等事業で実施した5件（軽井川南遺跡群第9次・春日陣屋跡隣接地・春日1丁目地点・女谷遺跡群等第2次・城東地区第2次）の試掘調査・確認調査報告を収録した。

5件のうち、遺跡の痕跡を得ることができた調査はなかったが、関係するデータを多く集めることができた。試掘調査・確認調査で得られる資料は、埋蔵文化財の保護に欠かせないものであり、本事業が果たす役割は大きいといえよう。

### ◀引用・参考文献▶

- 阿部文夫 1990「米山海底火山活動」市史編さん委員会編『柏崎市史』上巻 市史編さん室  
家田淳一 2000「擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会  
伊藤啓雄・平吹 靖 2002「柏崎市高原田遺跡の採集遺物—寄贈された考古資料の紹介—」『柏崎市立博物館報』第16号 柏崎市立博物館  
宇佐美篤美・寺崎裕助 1987「宮原遺跡」柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料（図・拓本・説明） 柏崎市史編さん室  
柏崎市教育委員会 1997『柏崎市の遺跡VI』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第27集）  
柏崎市教育委員会 1999『柏崎市の遺跡VII』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第31集）  
柏崎市教育委員会 2002『柏崎市の遺跡X I』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第39集）  
柏崎市教育委員会 2010 a『軽井川南遺跡群I』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第59集）  
柏崎市教育委員会 2010 b『軽井川南遺跡群II』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第60集）  
柏崎市教育委員会 2010 c『軽井川南遺跡群III』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第61集）  
柏崎市教育委員会 2010 d『柏崎市の遺跡IX』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第62集）  
勝田 至・吉田貴彰・川口 寛 1977『旗本安藤出雲守知行所 春日騒動』（柏崎地方における一揆の研究II）  
新潟県立柏崎高等学校地歴部  
新沢佳大 1992「近世郷村と柏崎町の成立」市史編さん委員会編『柏崎市史』中巻 市史編さん室  
新沢佳大・根立俊樹・高橋義昭・今井和幸・桑原紀昭 1992「近世郷村と柏崎町の成立」市史編さん委員会編『柏崎市史』中巻 市史編さん室  
高橋義宗 1986『鶴川の話』（鶴川郷土歴史研究会編）  
高橋義宗 1995『鶴川の話II』（鶴川郷土歴史研究会編）  
中野雄二 2000『波佐見』『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会  
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書I 瓢輪遺跡I』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集）  
野上達紀 2000『碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口』『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会  
盛 峰雄 2000『碗・皿』『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会  
渡邊三四一 1996「『あやこまい』ってなに?—綾子舞入門講座—」『重要無形民俗文化財指定20周年記念出羽・本歌・入羽—綾子舞、21世紀への伝承』 柏崎市綾子舞後援会

## II 軽井川南遺跡群（第9次） 1



## II 軽井川南遺跡群（第9次） 2



III 春日陣屋跡 隣接地 1



a. 調査区全景

(南西から)



b. 調査区全景

(東から)

## III 春日陣屋跡 隣接地 2



a. 調査対象区域近景

(南から)



b. TP-1

(南から)



c. TP-2

(南から)



d. TP-3

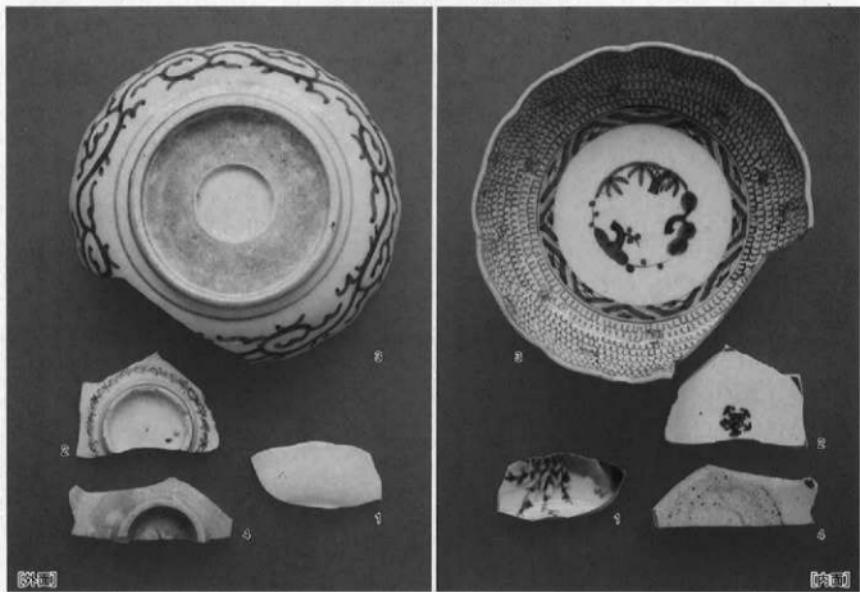
(南から)



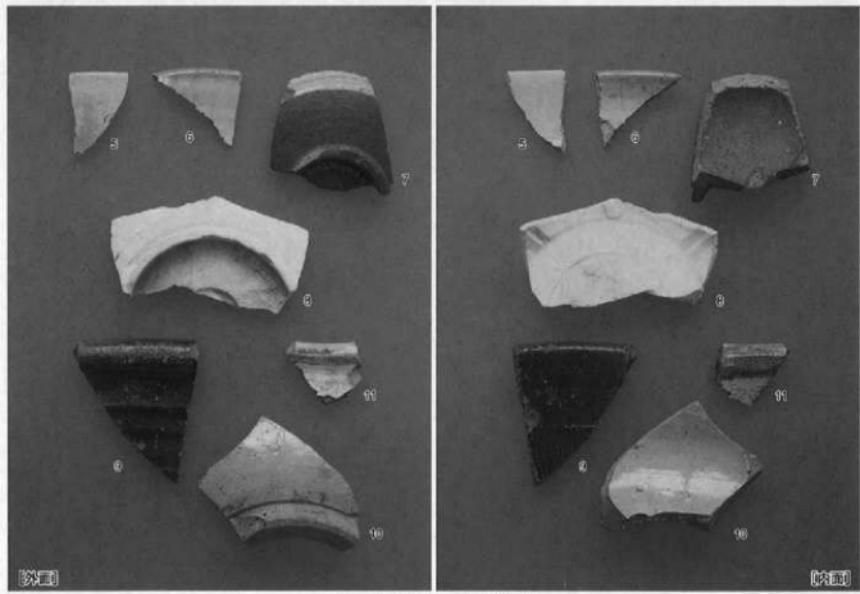
e. TP-4

(南から)

## III 春日陣屋跡 隣接地 3



a. 土壘状遺構周辺採集遺物



b. 調査対象区域採集遺物

IV 春日1丁目地点 1



a. 調査対象区域近景

(西から)



b. 調査対象区域近景

(北東から)

IV 春日1丁目地点 2



a. 試掘坑

(北東から)



b. 調査風景

(南東から)



a. 調査対象区域近景（TP-No.01～04付近）

(南西から)



b. 調査対象区域近景（TP-No.05～06付近）

(西から)

## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 2



a. 調査対象区域近景 (TP-No.06付近から)

(西から)

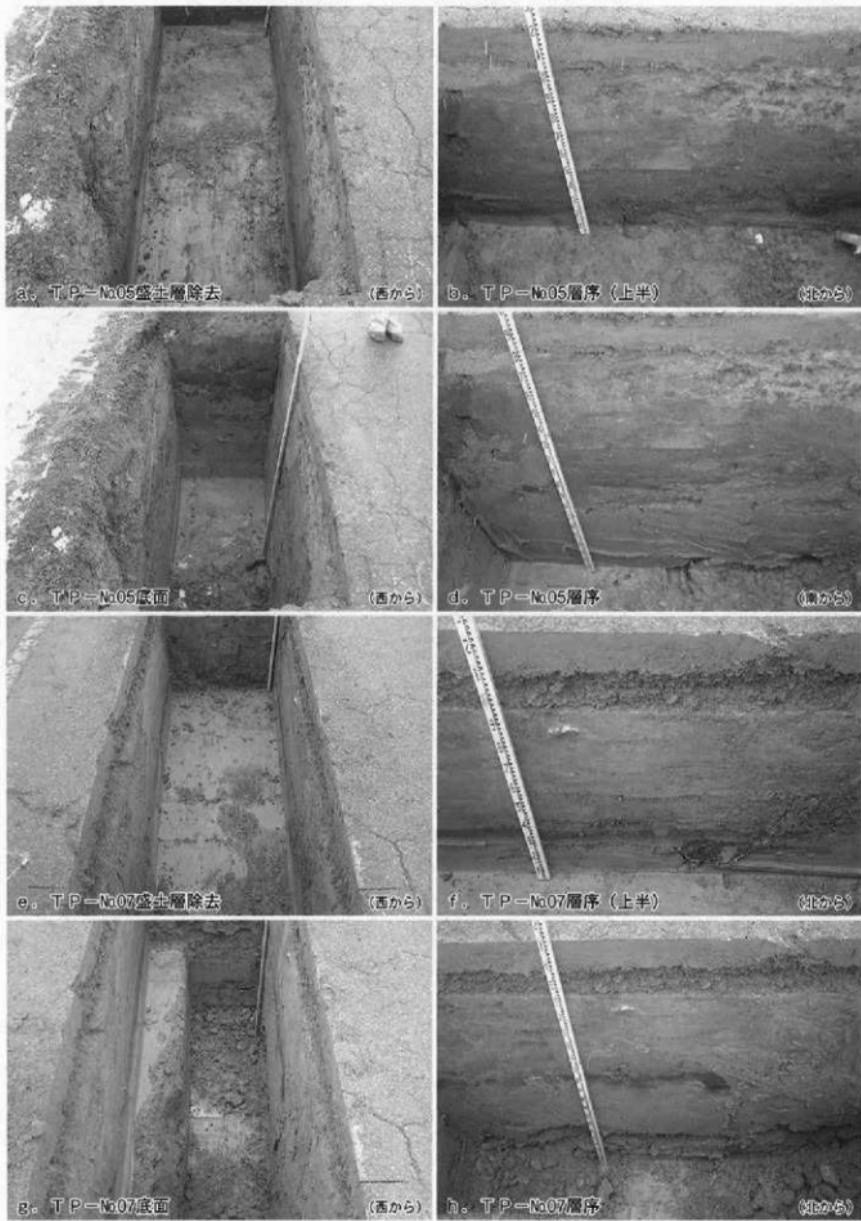


b. 調査対象区域近景 (TP-No.40付近から)

(東から)

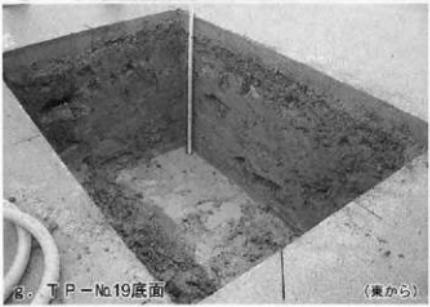
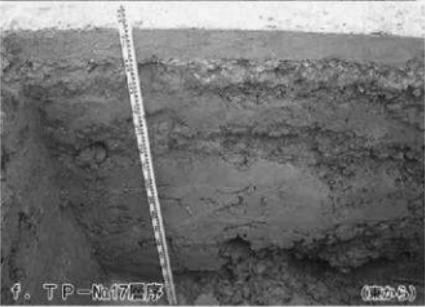


## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 4

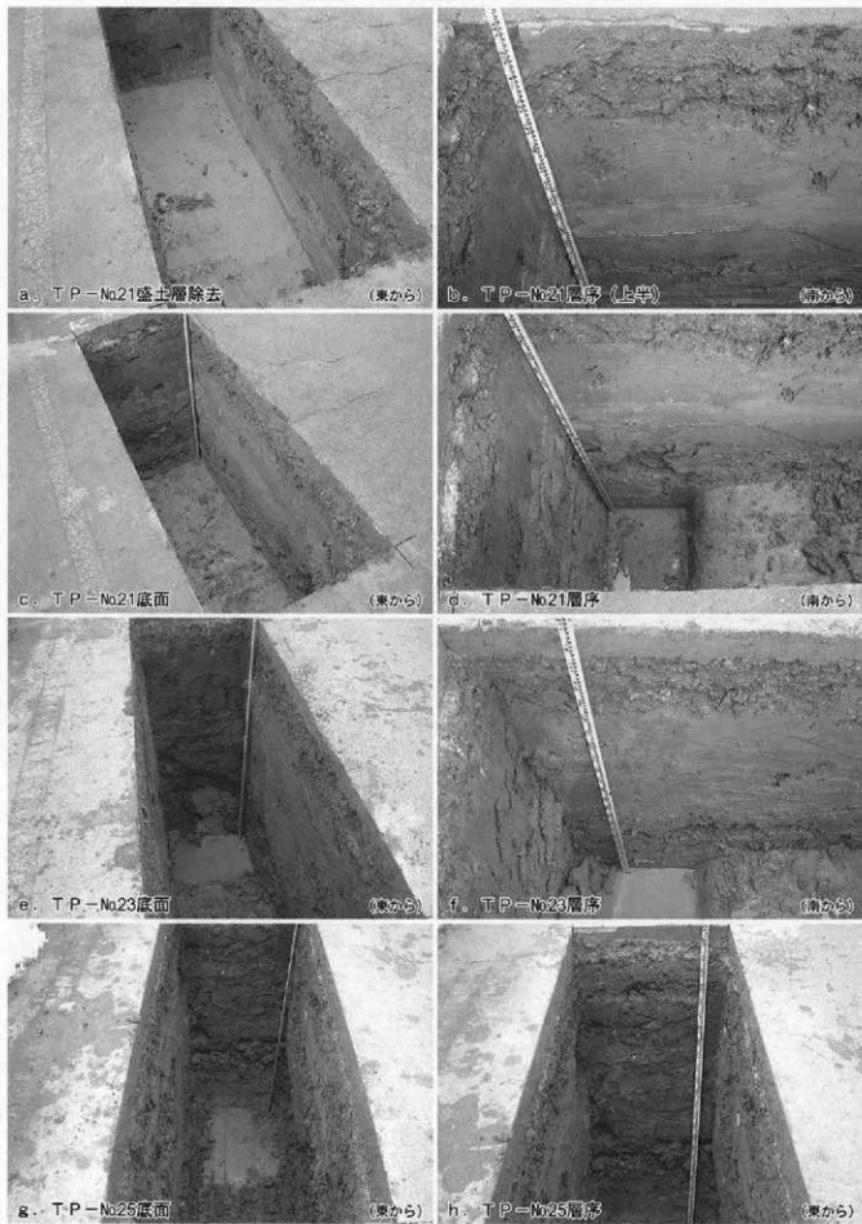




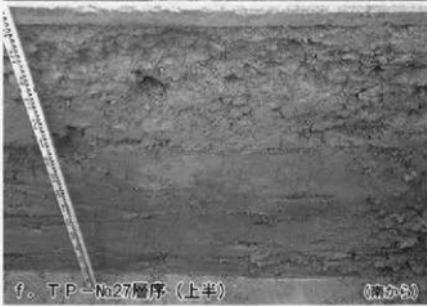
## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 6

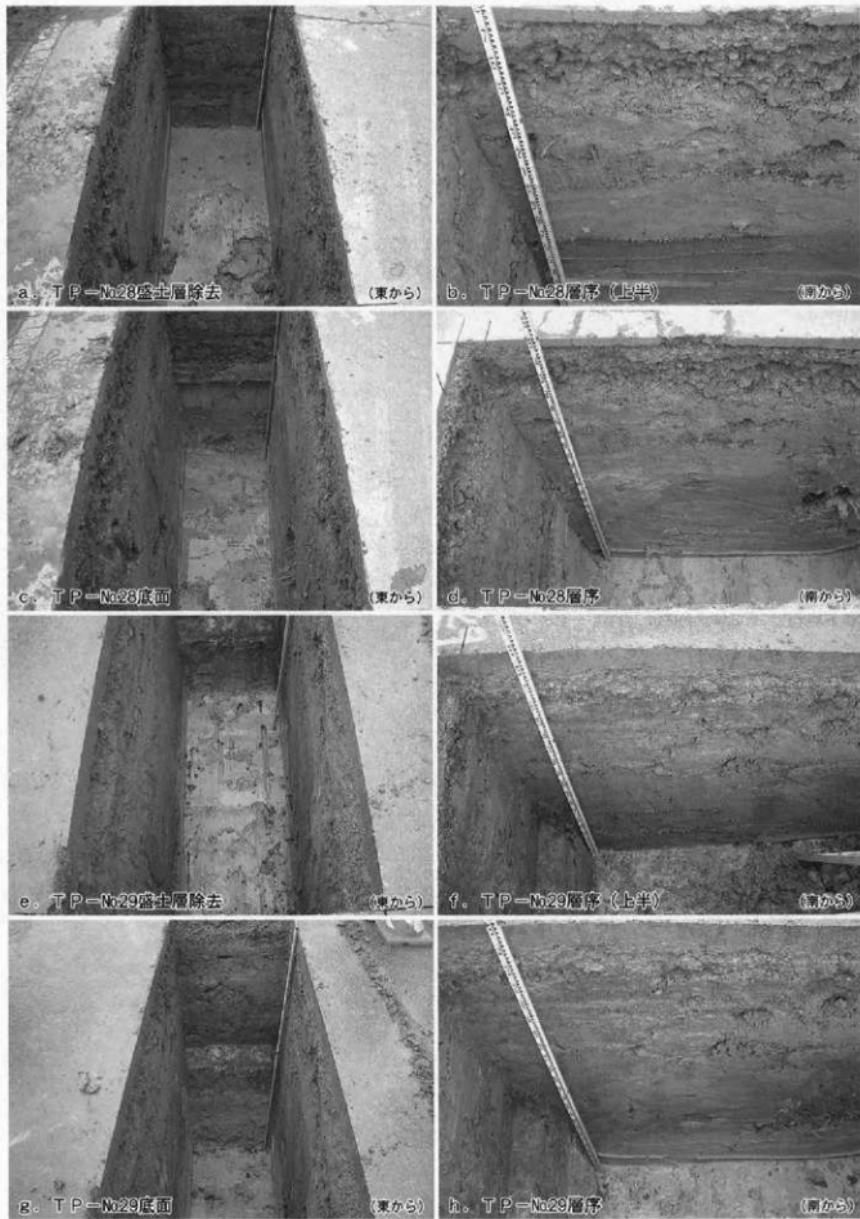


## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 7



## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 8





## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 10





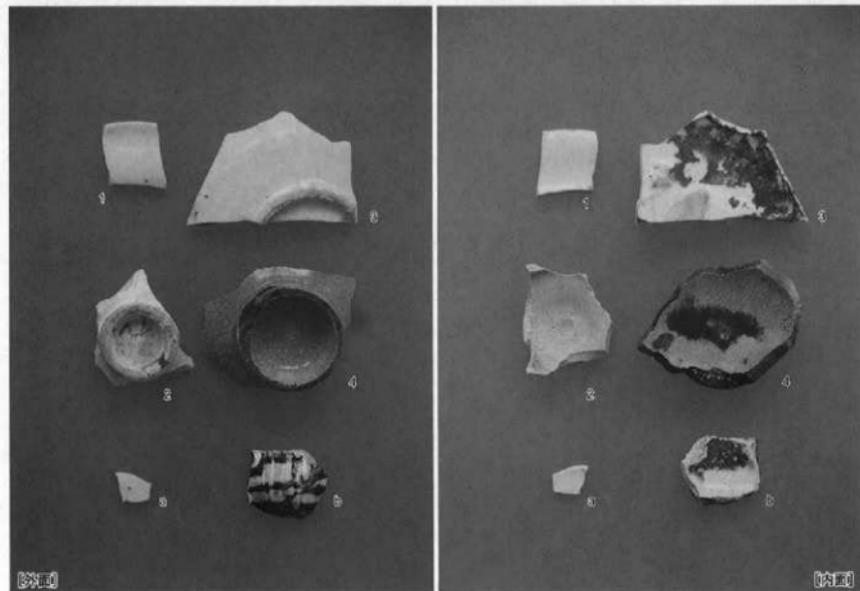
## V 女谷遺跡群・市野新田地区（第2次） 12





a. 試掘坑埋め戻し状況

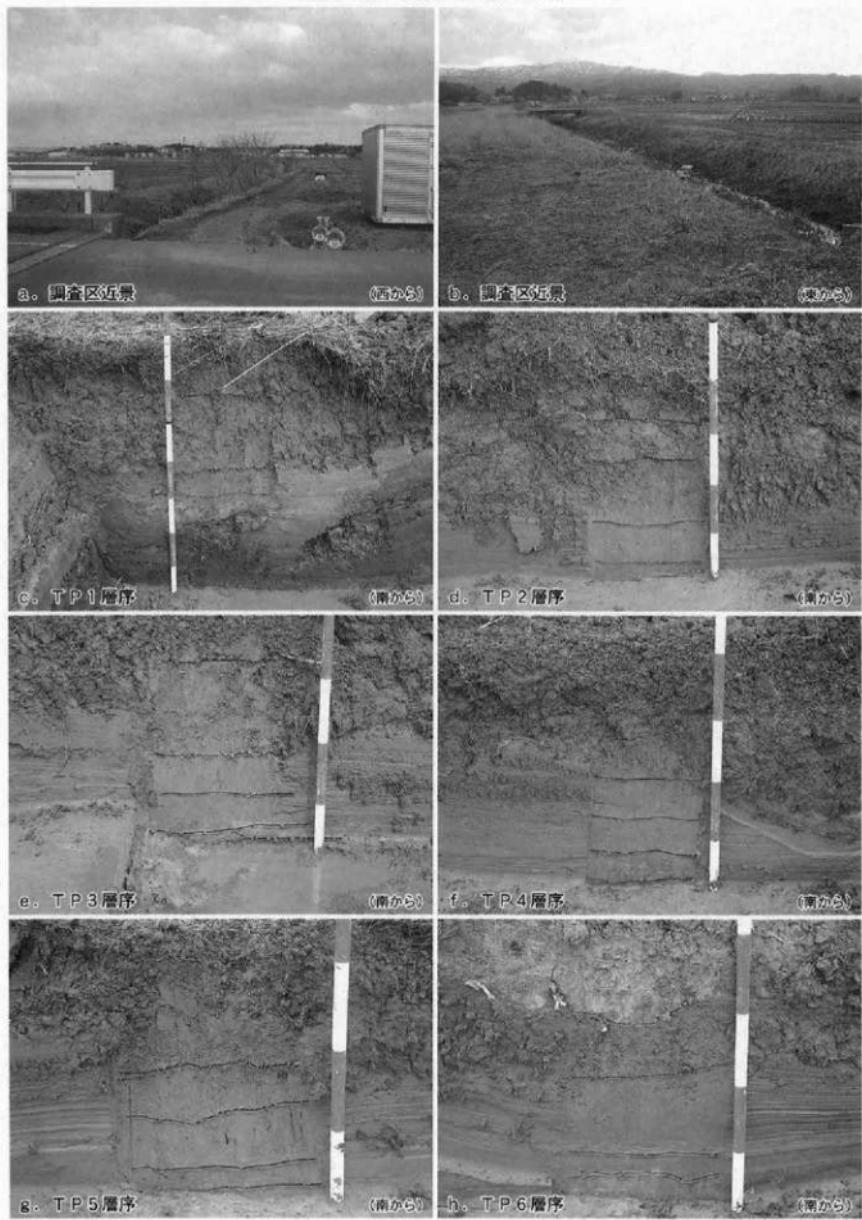
(西から)



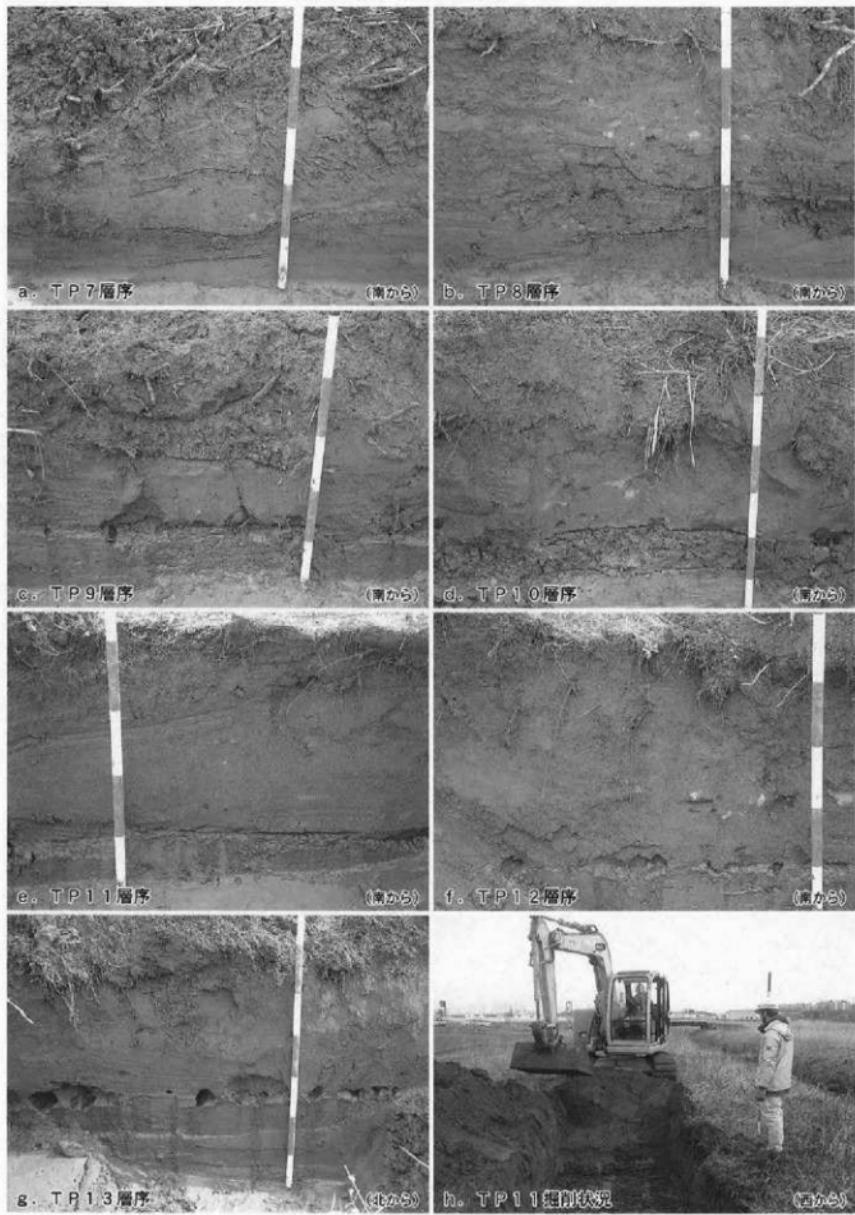
b. 出土遺物

(内面)

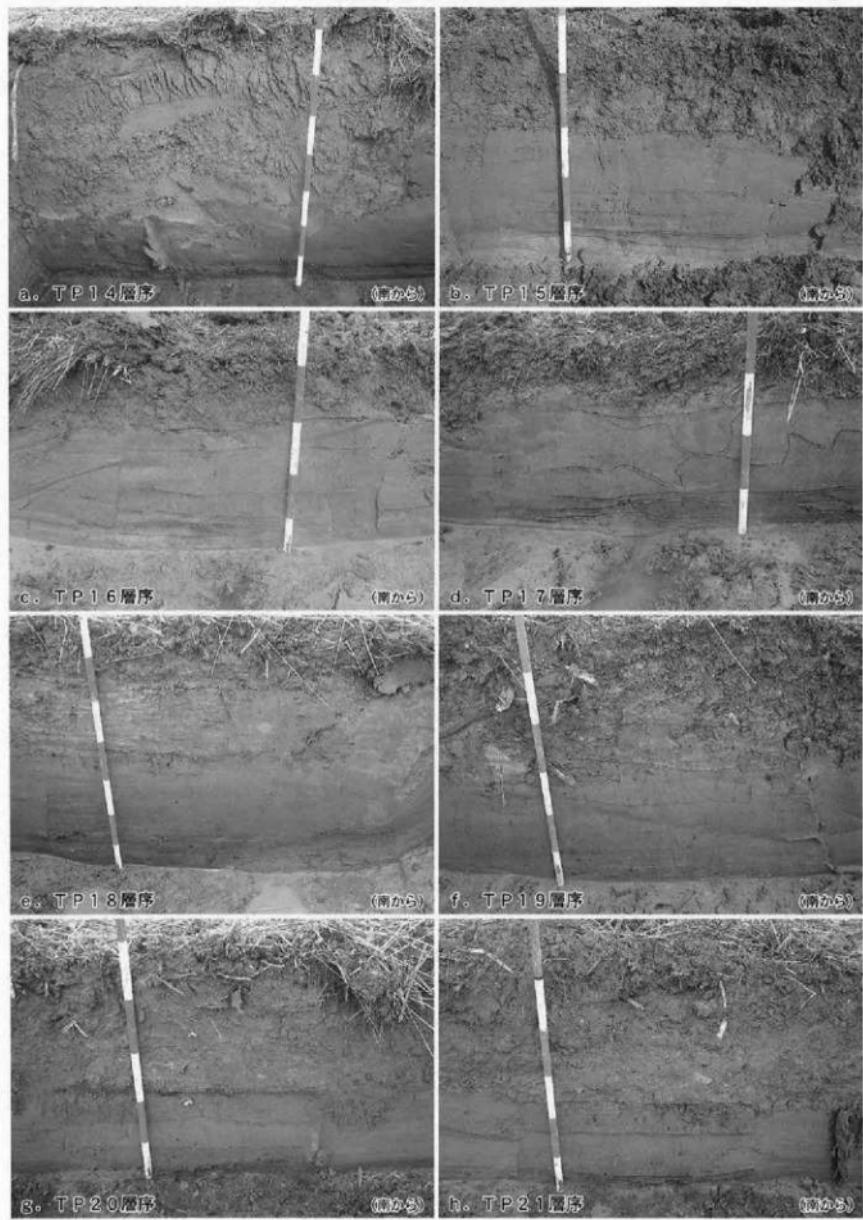
## VI 城東地区（横山川第2次） 1

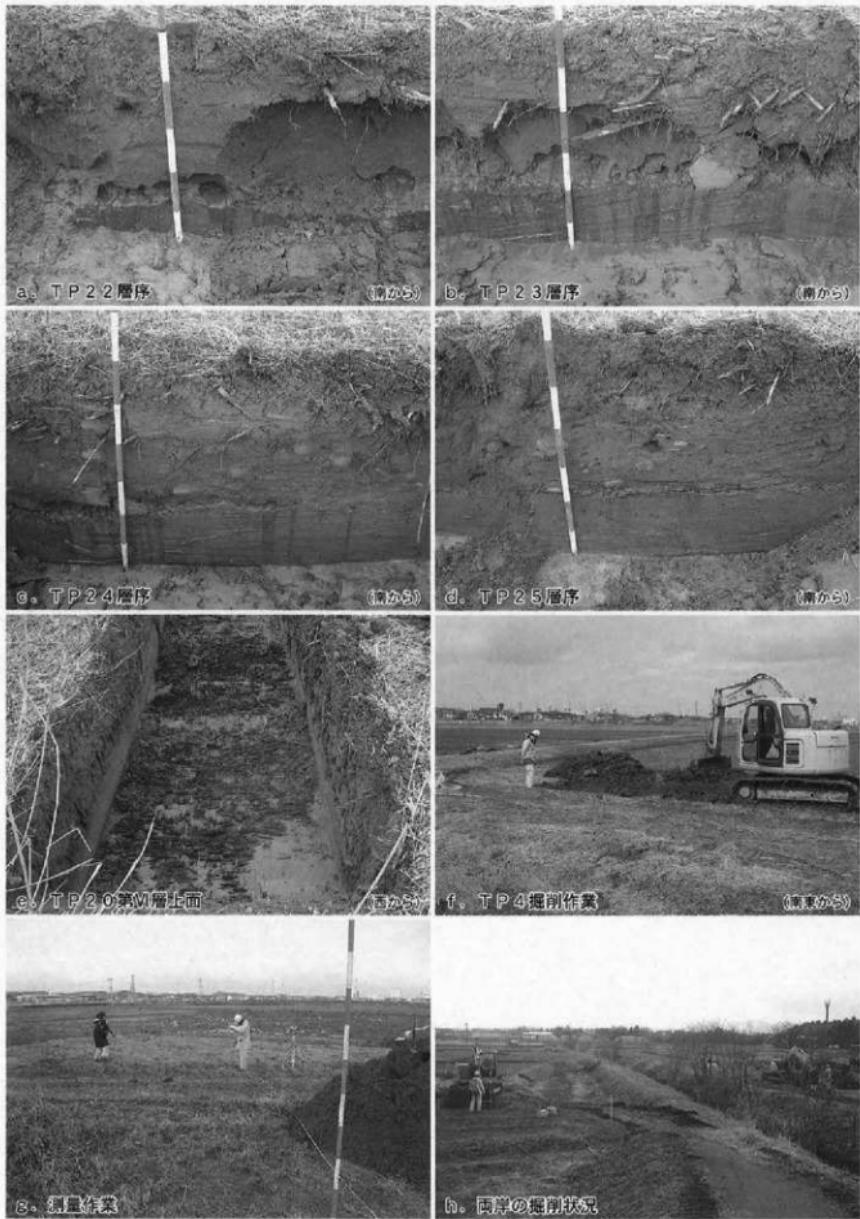


## VI 城東地区（横山川第2次） 2



## VI 城東地区（横山川第2次） 3





## 報告書抄録

ふりがな	かしわざきしのいせき 20							
書名	柏崎市の遺跡XX							
副書名	新潟県柏崎市内遺跡 平成21年度後半期発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第65集							
編著者名	伊藤啓雄(編) 品田高志 中野純 中島義人							
編集機関	柏崎市教育委員会							
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2011年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間 西暦年月日	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
軽井川南遺跡群 (第9次)	新潟県柏崎市 大字軽井川	15205		37° 20' 26"	138° 35' 24"	20091224	0.8	試掘・確認調査
春日陣屋跡 隣接地	新潟県柏崎市 春日2丁目	15205	702	37° 38' 27"	138° 57' 03"	20100210	0.6	試掘・確認調査
春日1丁目地 点	新潟県柏崎市 春日1丁目	15205		37° 22' 45"	138° 34' 09"	20100222	4	試掘・確認調査



柏崎市埋蔵文化財調査報告書第65集

## 柏崎市の遺跡XX

—新潟県柏崎市内遺跡 平成21年度後半期発掘調査報告書—

平成23年3月25日 印刷

平成23年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 有限会社 わかい印刷

